



日本百將傳一夕話

十

^ 13  
3566  
10





門 13  
號 3566  
卷 10

牛



小  
傳  
一  
夕  
話  
卷  
之  
十

東都

目錄

松亭金水謹撰

○ 楠正行すけのまさゆき

○ 源義助みなもとのかげすけ

○ 足利高經あしひたかたか

○ 細川定禪ほそがわのさだぜん

○ 赤松則祐あかまつののりすけ

○ 桃井直常うづののりつね

百將傳一夕話卷之十目錄

○ 目

洋書堂藏板



- 山名時氏
- 新田義興
- 菊池武光
- 楠正儀
- 足利基氏

以上十一將目錄終

東雅

休亭金水齋

日本書紀卷之十

楠正成	河内守
正行	左衛門督
正之	人和守
正儀	檢非違使 左工門位
正勝	檢非違使 左工門位
正元	楠小次郎
正教	池田十郎 兵庫介
未	正行が妻後池田 未正教ヲ生

### 楠正行

人皇九十九代 光嚴帝貞和五年正月戰死  
今安政三辰迄 五百八年 成

楠正行者正成子也年少有父風雖

勵繼志之思不幸没于軍吁惜哉

正行樓井の深小於て父正成に兵庫小從りと以正成とを論くは汝を遺すとの  
 恩愛の爲にあらば王室恢復の功を遂げんとす。別を怖るを思女の泣きを以て  
 小あはれありけり。正行頼小とを懐く夫より河内へ引返り年甫て十二なり。其  
 父後川に戦死す。その首を尋ね及び持佛堂に入て自害せんとし。時その母大い  
 の遺言を忘れずや。あはれ志を何の益ある。とてその刀を奪ひけり。正行泣くを止  
 まり。夫より益後復讐を志す。然とて日多病なり。まご時至らばとてを徳木崩下  
 小死さ。何の面目ありと軍を起して竟に自盡す。呼惜むきの英雄なり。

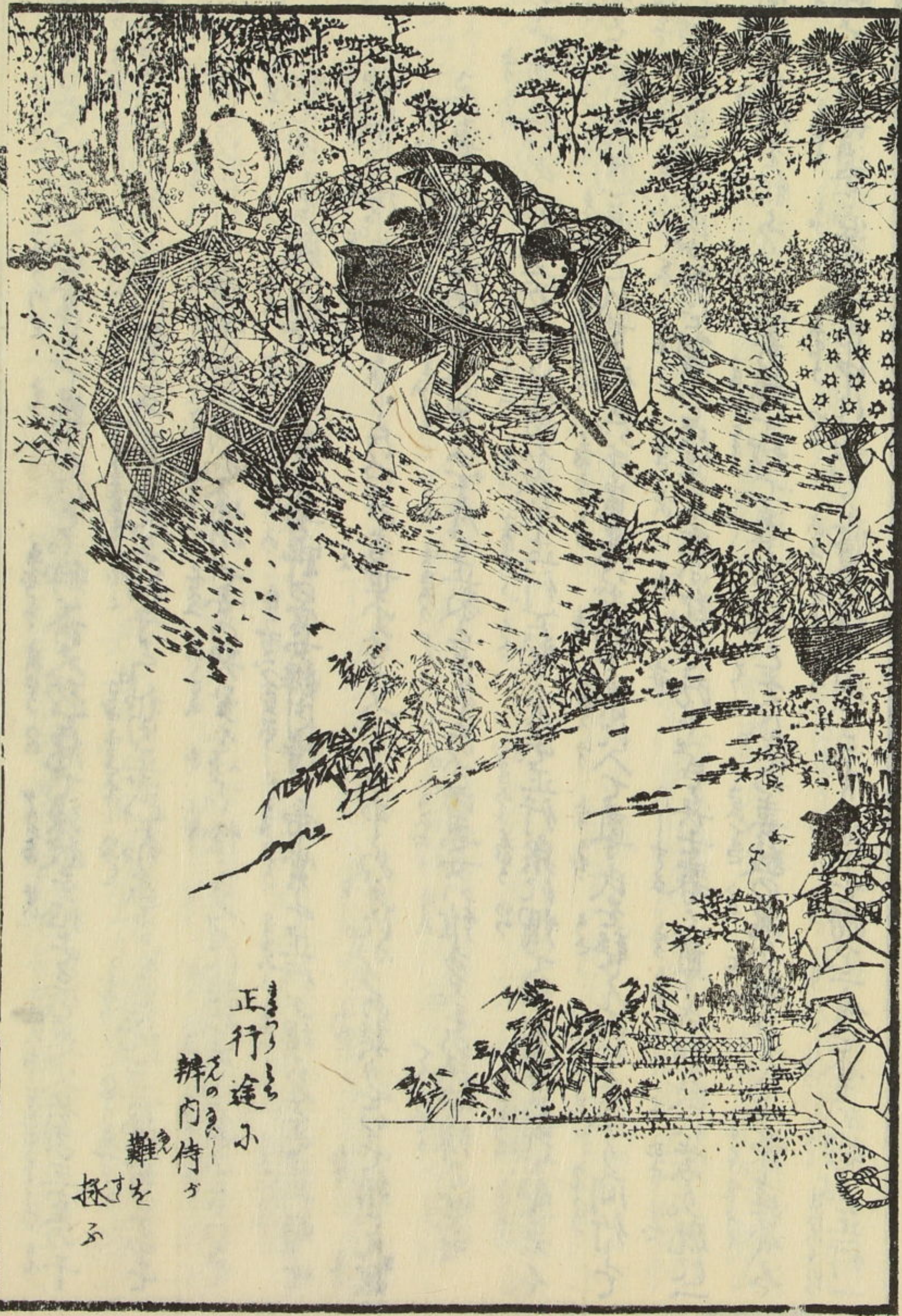


楠正行の活

楠正行の世の忠のついに思ひあひつゝ正行が忠孝杖桑に討つるに成が智量天下後世に世を蜀の孔明小比叡と譽せざる者なり然も其の時小比叡新田貞貞北畠顯家名和長平千種顯忠の餘の將士多くて聖徳由まき登あまは謀計智略其國を以て百戦百勝の功を究む然るに正行の世小比叡と利氏北朝の天子を換へ新從多目本六十六及び小比叡の武令に應ぜざる者僅に二及小比叡補正行をを續ぐて六十餘を教し亦志を屈せざる忠孝を守り金藤鐵腸徳兆の八小勝を以て六六南朝正平二年の北朝貞和元年は正行二十五歳より尙須臾の體を復さすことと志を絶せども時を俟ていよいよ軍を發せりし正行平生に多病あり固て諸長を集めていも嘗てやく父の體に共其小文を讀むと父戰没の後數年に在て更に兵を起さばいよいよ時の時を待たば然るに日多病恙且暮以外とて河の面目あつて是君小地下に見あつて海に固て今兵を起し教

と雌雄を決せんと欲せしは若のい男とあり諸長を以て應に固て正行軍を以てまが松及天皇寺に屯り利氏を以て細川顯氏を以て和區万平修務を以て正行を替へんと正行教の責を授け其を分り萬兵を引て千劍破に陣り和田守家とて和泉の城を守らせその弟新谷意源秀とて八尾の城を守り顯氏後志の橋小幸り正行の兵在りて四千人修務下を夫尾に赴く平六百人修務を和泉に赴き躬七千二百修務を千劍破に攻んと修務亦に至り正行七千人渡り兵を八幡の山下に匿し先兵を向て夫尾の陣へ号し顯氏を陳に至り別小使を以て和泉の城に新谷意源秀貴陳に降未せんと欲せしを以て即刺至らんとし修務を以て顯氏を以て夫尾に攻めしを以て修務は正行が軍陣に是れを油断と在ける所小正行七百餘兵を率ひ旗を卷き敵を以て進んで突戦し快き所の奇兵發り前後より攻む顯氏大小損傷して敵小中及ぶと修務は逃ぐ正行遂に六百里外で首を斬り四十百十餘級と紀し顯氏胸を脱して陣に正行兵を止めて朝に福



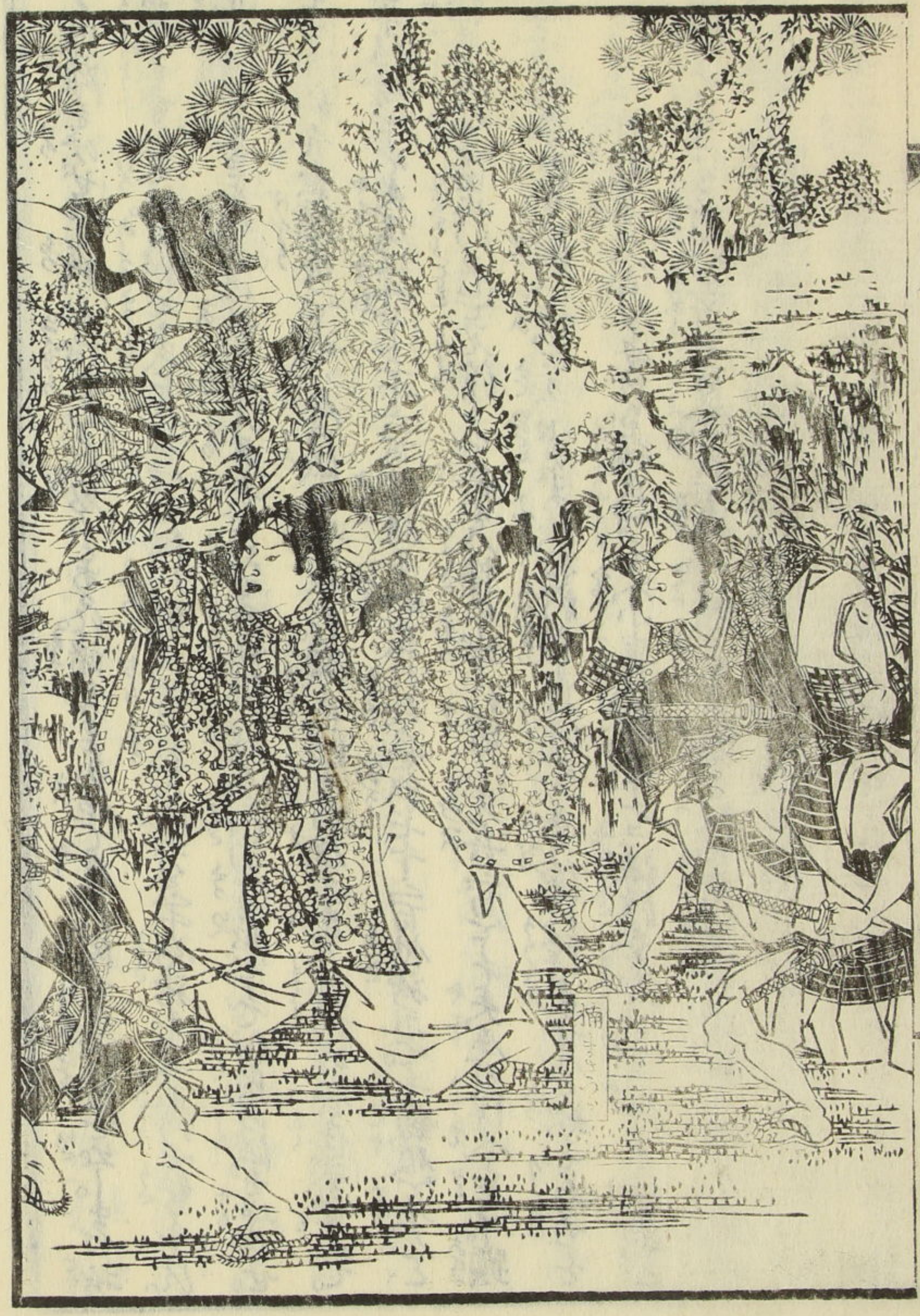


百將傳一多話卷下

〇五

洋玉堂藏板

正行途小  
 辨内侍  
 難  
 採



百將傳一多話卷下

洋玉堂藏板







嗟正行が仁えつべし。軍陳小教を替へ若父の爲世の爲小て人を殺せと誓むはあはれ。世羅の  
 軍卒満るとして。愛憐とて接ひ還ひおの如死の人小て。竟小本名を達せざるは。実小夫命  
 あるのあらん。かくてその年暮と貞和五年。南朝正平四年なり。その年正月。夏利若  
 氏執事高武花守師連と若弟泰に命下。再び正行を替んとて。六万餘騎の勢を  
 授く。高の兩拍隊伍を備へ。既に洛を進発せし。正行軍中に死せし。弟正時及び一族  
 を引芳野の宮小領。四條中納言隆資をて。奏候小及ひける。若く亡父正成親弱と人の  
 ども。先帝の命と受大教を推き。方軍小排ふ。然も由致于あらず。城西海小起て。事畿  
 と侵む。勢の對まへり。とて。身とて。即小殉ふ。時小長歳十二。櫻井の沢より。こを。作  
 と。教るに。残る所の一族を。投持し。軍とせ。一。力と。場と。朝家と。守れ。と。被后父が。命と。容  
 て。故小。級。の。後。干。を。枕。と。塊。に。伏。て。餓。を。付。ま。る。と。を。忘。ま。さ。ず。と。も。長。多。病。多。り。且。暮  
 の。命。算。る。べ。く。び。若。統。小。幡。下。に。死。さ。し。與。小。天。を。戴。く。の。事。と。違。ま。さ。ず。今。般。の。軍。故。お。る。

師連が首と獲て。降頭小曾く。う。ま。我。首。を。渠。小。授。る。ま。の。兩。奉。と。決。せ。さ。し。再。小。作  
 り。泰。り。ト。と。な。ま。さ。れ。バ。天。朝。を。拜。ま。さ。り。今。日。と。涯。ま。り。と。忠。志。言。語。小。顯。ま。り。義。情。面  
 小。露。ま。け。り。天。皇。南。殿。の。四。條。と。控。せ。正。行。を。召。す。て。の。も。正。成。以。來。投。敵。の。功。大。教。を。碎。き  
 て。朝。室。を。接。ぐ。累。世。の。忠。勤。比。ひ。希。れ。ま。り。然。も。凶。賊。多。く。今。般。ま。り。降。軍。大。兵。を  
 盡。し。未。だ。攻。む。実。小。天。下。安。危。の。秋。の。一。奉。に。繫。ま。る。な。り。汝。股。肱。の。力。を。竭。し。法。教。を。控。へ  
 べし。腹。を。憑。む。所。の。股。肱。は。汝。二。人。の。こ。と。敵。慮。の。ち。と。畏。ま。り。正。行。更。小。言。語。あ。く。流。し。垂。て  
 退。出。し。夫。より。先。帝。後。醍。醐。の。廟。小。獨。し。正。行。正。時。以。下。の。兵。士。百。四。十。六。人。の。姓。名。を。壁。小。記。し。死  
 して。余。前。と。ま。さ。り。小。師。連。師。泰。の。六。万。餘。騎。の。大。兵。を。奉。ひ。四。條。邊。に。軍。以。南。軍。四。條。隆  
 資。の。赤。象。紀。伊。の。野。士。三。万。と。奉。て。既。登。小。登。つ。て。陳。ま。り。正。行。正。時。餘。勢。を。奉。て。その。軍。と。し  
 隊。小。す。今。日。の。戦。ひ。は。父。淡。河。の。事。に。同。く。谷。の。原。子。なり。心。力。を。竭。し。て。り。先。君。を。奉。む。



正行が兵死力て獨りぬるに退崩を固て長湯資宗を松田重明青砥有元入替つて  
 突戦を依り木道末由道兵勝つて二千餘騎出で正行が兵小退つて挑之戦久正行の後  
 軍大不潰之残り新之百騎正行左右を首を大不呼つて勇戦一りて千餘騎軍大  
 不披き懸き正行陣連と隔つるに千歩をりある。正行初比面由揮之舊地不流通  
 陣連懸危きよりうと山に赤空門ある者延隔て陣連と名乗て不戦死せし正行其  
 首を獲て大不悦び將軍と號する間不陣連危きを脱せり。脱介て陣連不捕ざるを  
 知つて怒に依り猶追撃んとせり。是を遙不洛伸之と不陣連が兵須々木四郎次  
 を放つて之を防ぐ正行正時中麻を彼より陣連と獲へり。是を正時不謂てのる。後  
 とて不忠不死。子とて不孝不死。と如今俱不之を得り。と同胞乳軍の中不  
 殺を于時正行二十五歳叶惜むと

其先新田義貞の  
 朝氏 勅田三郎太師

源義助

公皇九十七代 光明帝 應應三年 五月卒  
 今安政三辰追 五百十七年 成

義貞 左中將 從四位  
 義助 刑部卿 正五位下  
 義治 左衛門佐 成之四國(瀧)

源義助者義貞弟也號脇屋初義貞之討高時也義助  
 勸義貞速起義兵既而高時殲以功賜駿河國泊義貞之  
 伐尊氏也義助奉皇子赴竹下官軍不利義助力戰拔其子  
 義治于萬衆之中其勇銳不少義貞尊氏比年之軍爭義  
 助常有其勞焉義貞死平越前里光城下義助憤耻之奮攻  
 陷之其後到上野受南帝命而赴南海將再倡大兵未幾而卒

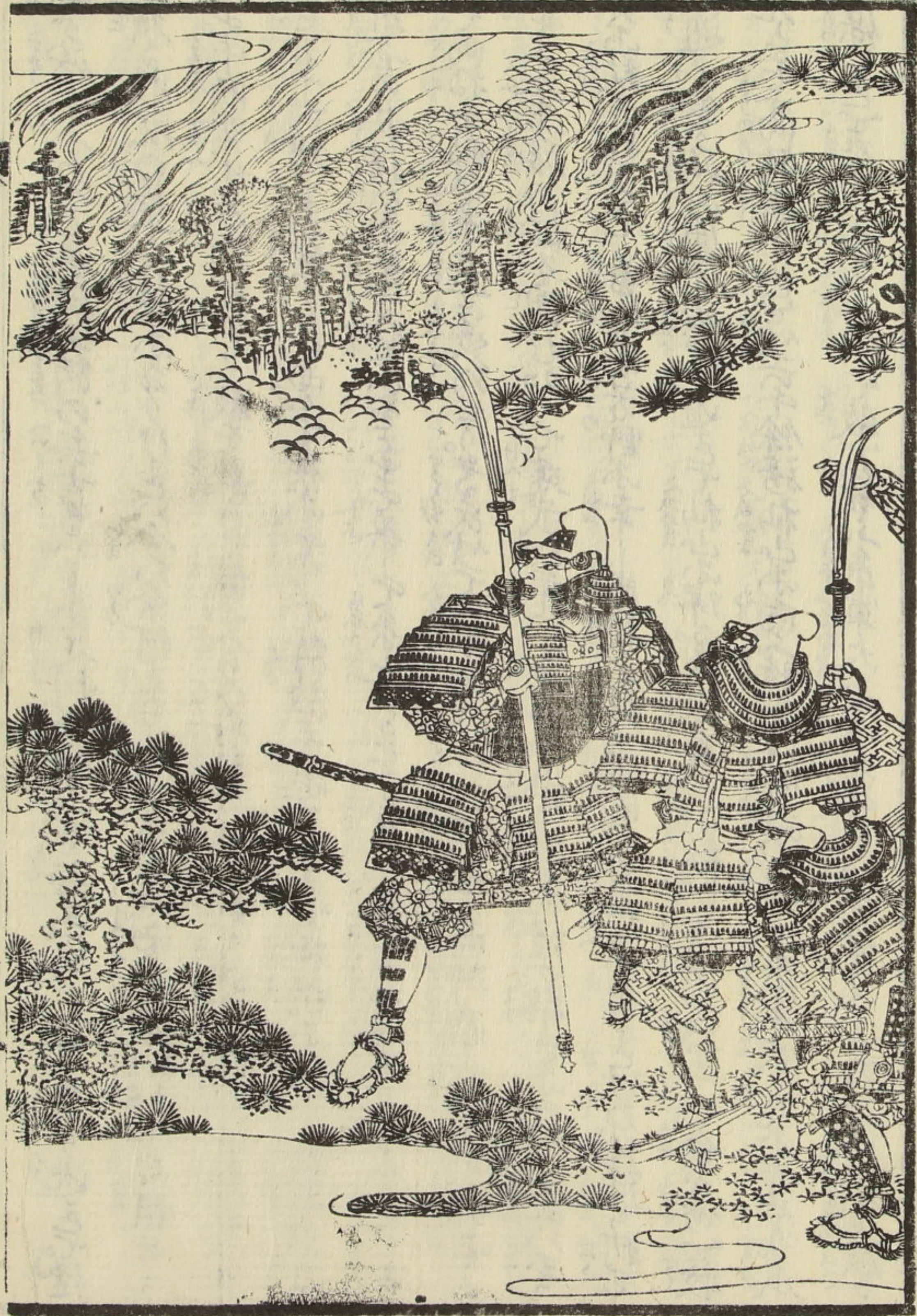


源義助の結

王室恢復小功ありて。諸勳賞の時小功あり。後河の國を獨りして。小前小由んえ言  
 じ。然るに建武の紀記。尊氏氏東及小威を張小及びて。兄義貞小従ひ一宮中務親王  
 を奉て作の下の教小對。大小勇威を奮ふこと。も衆寡敵せず。礼は。義貞の  
 由散兵を集め。途小教を防ぐと。天皇。天皇を徵す。小より。義貞等の諸將。係  
 せり。その後。尊氏系師。と。義助。小防ぎ。き。軍利ありて。引返。天皇。敵に  
 之の。延元元年春二月。赤松朝家小叛。と。必。義貞。うち向。て。攻。む。然。る。に。協。固。て  
 將。校。を。于。時。義。助。義。貞。小。謂。て。い。ふ。尊。氏。大。軍。を。帥。て。奉。都。で。祀。を。君。上。初。と。り。僅。る  
 一。城。小。拘。む。と。ひ。兵。を。鈍。う。ま。う。と。策。に。あ。む。む。如。ト。の。圍。を。棄。て。西。及。に。信。り。久。と。義。貞。見  
 を。然。り。と。て。義。助。に。兵。二。万。を。授。け。中。國。を。征。せ。む。義。助。軍。小。初。と。て。備。前。小。到。り。赤。松。が。兵  
 舟。返。の。論。小。扱。て。こ。を。防。ぐ。因。て。中。國。の。路。通。せ。む。と。小。返。す。と。初。目。あり。と。小。與。濟。之。際

高徳使を遣て義助に必勝の利を告て。躬能く小記りし。との義助大に敵びて。其計  
 策小應下けり。高徳僅小二十人誘懸小し。つて威を示せ。敵遂て舟板を棄懸。小お  
 切入高徳殺十合教小せむ。舟板の途で困。義助石の南小出。賊前。後小教。受。旗  
 旗を棄て。遁。ま。は。義。助。備。前。美。佐。小。入。て。多。く。殺。賊。を。降。け。け。小。於。て。義。助。が。勇  
 名。中。國。小。輝。り。然。る。に。尊。氏。大。軍。を。奉。て。備。前。より。攻。登。り。の。義。貞。被。て。義。助。を。招。き。是  
 と。共。小。兵。庫。小。疎。ま。去。の。時。の。義。貞。正。敵。開。死。し。義。貞。兄。弟。敗。せ。し。兵。を。纏。め。て。洛。小。降。し。  
 希。ま。く。敵。小。避。り。夫。より。義。貞。縁。を。定。め。賊。を。討。ま。す。と。官。軍。振。り。む。尊。氏。奏。し。て。先。帝  
 級。降。せ。希。恒。皇。親。王。を。統。し。義。貞。兄。弟。と。北。國。小。赴。り。む。義。貞。被。前。金。が。誘。小。入。し。義。助  
 小。干。誘。を。辱。し。瓜。生。保。が。和。の。城。小。入。し。む。と。小。良。利。尾。張。守。高。徳。命。を。受。て。二。方。餘。兵。集  
 勢。の。城。を。圍。む。と。是。より。高。良。利。を。経。回。を。の。り。て。保。を。脱。き。我。軍。小。降。ら。む。保。が。弟。義。澄。房  
 是。を。知。て。義。助。小。請。ひ。その。子。義。治。を。止。め。と。し。義。助。集。が。貳。万。三。千。を。奉。り。て。義。治。を。統。し。其。兵





百將傳 又話卷之十

八

洋玉堂 成 反



義助道小  
八幡の煙と  
観て  
軍女  
還る

脇屋ト助

百將傳 又話卷之十

和 玉堂 成 本



金少誘小入らんとて從新の兵士を以て。果足利の威風を恐る。あつては逃して僅  
 小殘る股肱の臣。十六誘小入りけし。今奈何と由。給方。義助。義助。自殺せん  
 と。于時。栗生。天門ののち。故を欺きて。城小入ら。若。敢。欺。き。と。知。て。邊。に。一。戦。し。て。死。せ。ば。さ  
 の。こ。と。十六。誘。ま。然。と。も。栗。生。夜。小。未。だ。て。旗。旗。を。遣。つ。と。と。七。樹。柄。小。籠。へ。物。明。小。及  
 び。近。赤。の。兵。援。ひ。小。未。だ。は。誓。ひ。を。ま。き。果。て。系。兵。と。小。擊。く。義。助。城。中。より。兵。を。見。て。あ  
 出。て。両。拍。を。救。ひ。系。兵。と。遂。討。せ。り。栗。生。は。大。怒。り。仁。木。頼。章。高。降。泰。三。招。て。援。兵。と  
 し。ま。る。金。少。誘。の。城。を。圍。む。か。く。て。建。武。四。年。に。あ。り。瓜。は。保。高。純。が。招。き。小。應。一。旦。八。義  
 貞。小。教。ま。ね。き。と。希。潛。小。芳。野。小。幸。一。南。朝。と。稱。一。徳。國。の。勢。群。集。ま。る。と。は。及。以。謀。と。新。田  
 小。通。下。金。少。誘。の。圍。も。潛。小。遁。ま。て。杜。山。小。降。る。義。隆。房。大。小。敵。ひ。義。隆。を。招。つ。て。金。少。誘。を。救  
 へ。ん。と。高。降。泰。と。して。六。千。餘。誘。杜。山。小。向。降。雪。清。と。湮。三。系。軍。寒。氣。小。若。め。り。瓜  
 生。保。高。と。義。一。夜。小。未。だ。て。敢。て。義。隆。系。軍。大。小。潰。え。奔。り。槍。小。せ。り。の。一。百。餘。人。追。擊

は。老。殺。せ。ら。れ。し。師。泰。海。く。脱。せ。り。か。て。軍。見。伊。賀。守。五。千。餘。兵。小。招。つ。て。保。義。隆。房。等  
 こ。ま。小。從。ひ。金。少。誘。を。救。へ。ん。と。高。降。泰。先。途。の。恥。辱。を。雪。ん。為。小。二。万。餘。誘。の。兵。と。卒。一。討。て  
 出。候。須。小。待。て。送。ひ。關。入。杜。山。の。兵。大。小。敗。ま。し。伊。賀。守。以下。保。義。隆。房。の。役。小。殺。死。せ。り。系。軍  
 頗。り。小。威。を。震。ひ。小。令。と。金。少。誘。を。十。重。干。重。に。う。ち。圍。む。時。小。城。中。糧。之。牛。馬。糞。衣。を。食  
 ぶ。小。至。る。義。貞。義。助。軍。士。の。窮。乏。援。へ。ん。為。小。城。を。出。杜。山。小。入。て。軍。兵。を。集。め。ん。と。ま。ま。と。應。ず。  
 老。者。小。計。竭。て。從。小。救。目。と。経。ま。す。猶。果。さ。ま。城。中。の。糧。小。通。も。食。ひ。盡。す。と。十。餘。日。経。ま。す。  
 斃。る。の。二。身。も。機。で。得。て。連。小。攻。む。城。兵。皆。と。結。び。義。親。王。乃。び。義。顯。自。殺。一。春。官。恒  
 良。親。王。小。擒。り。ま。す。系。小。入。り。明。且。小。應。元。年。と。も。義。貞。義。助。謝。り。小。て。二。千。餘。誘。乃  
 兵。と。聚。め。再。び。討。て。出。ん。と。栗。生。氏。は。皆。て。高。降。小。六。千。餘。誘。を。援。て。ま。ま。と。呼。び。む。の。戦。ひ。を。経  
 ぶ。軍。慮。大。小。相。違。て。府。の。城。小。降。り。ま。す。今。つ。て。長。河。の。城。小。入。り。小。放。て。國。中。の。兵。招。く。と。小  
 官。軍。に。降。り。義。貞。義。助。威。を。振。へ。り。あ。小。北。高。頭。家。小。安。倍。野。小。殺。死。一。八。幡。の。城。小。降



新田義興が軍兵を大小屋まで遣えけし、南平重筆の勅書に傷ひ、情を救ふ  
 べしと詔命あり、貞良も躬に信を九の墨を圍ふ、義助も二方勢を副へ、情の故を援け  
 ち、尊氏攻て八幡の攻兵高師連小三正と告ぐ、師連慮ら、故責の二縦をて、悪くも  
 と火を八幡の神敷小放つ、城兵頻りに復復まると、高師連附とて、攻む、城中松と九  
 郎との老力百人小對せし、とも性怯弱して、股慄き、まると、能くも、木十郎小助  
 まま、命を奪て、敵小向ひ、大石大木と擲下し、まると、小壁まで、漢小偏に死するの、甚多く、未  
 兵をまて、まると、退く、義助も、將敷、在に在て、八幡脱小偏と、名ひ、速小来り、援を、城中益  
 困る、頭、信義、興、夜小、下、城を出て、身を、匿ま、義助も、まると、兵と、引て、越前へ、戻り、けし、初て  
 後七月二日、義貞、九の城を、攻て、流矢小命を、須き、義助も、まると、まると、知る、び、石丸の墨、下り  
 已小て、まると、天小怒て、重九と、重小、屠らんと、せし、まると、總軍上、初の、戦死、せ、機を、屈、力、弱  
 了、まると、まると、残る、兵、二千、可、義助、奈何、と、まると、まると、河島、某、と、まると、まると、峰の、城、守、せ

烟六郎左門を、て、清の城を、守り、せ、の、瓜、生、と、て、ね、山、守り、せ、其、身、を、治、と、初て、府の、城、小、入、り  
 壬午八月、後醍醐天皇、芳野の宮、小崩、沖、あつて、皇子、義良、位、小、即、り、まると、まると、後村、と、天  
 皇、と、号、ま、義助、壬午、府の、城、小、還、り、兵、と、集、めて、重九、と、攻、落、せ、まると、まると、所、天皇の、崩、沖、小、遭  
 ひ、清軍、ま、小、機、を、失、る、固、て、誓、く、黙、止、せ、小、芳野の、新、幕、も、賊、徒、追、罰の、論、旨、を、給、け、まると、まると、  
 大小、敵、は、暴、小、勢、を、語、り、ひて、國、府、を、奉、て、救、城、下、一、機、を、飛、と、兵、と、募、り、烟、將、能、く、清、軍、を  
 金澤、長、湯、河、合、河、に、救、城、を、援、て、義助、小、會、ま、由、良、光、氏、堀、口、氏、政、各、兵、と、率、て、救、城、を、請、り、  
 義助、小、會、一、けり、その、勢、都、て、七、千、餘、騎、重、小、重九の、城、を、圍、む、城、主、尾、張、守、高、經、八、固、く、守  
 り、まると、まると、を、防、ぐ、城、兵、と、木、兵、九、麻、家、光の、吳、見、小、就、て、高、經、火、を、城、小、放、ち、夜、小、兼、り、  
 て、富、樫の、城、小、入、は、あ、小、能、て、服、屋、義助、精、く、威、を、振、ひ、けり、高、經、の、す、と、尊、氏、小、告、ぐ、  
 尊、氏、信、て、ま、は、頼、遠、作、木、氏、頼、と、將、と、て、義助、を、靜、む、義助、一、戦、小、利、を、失、ひ、城、を、棄  
 て、根、尾、小、奔、り、系、兵、續、て、まると、まると、を、攻、む、まると、亦、まると、小、由、徳、と、尾、州、小、逃、ま、十、餘、日、に、まると、まると、芳



野小治つて小系兵一戦小利と得て後助遠く奔りけり夫より官軍方の救城と着は  
 こ不於て國中不相時能守る所の鷹巣一城と残りけり。諸軍合してことと攻む時能僅  
 小二十七騎。う防戦して縮らむ。かくて義助勅と奉り。四國中國と靡けし後及今張の浦小  
 到る國守大領左馬頭義朝とて迎て城小入し。王肥得能河田武市。日吉等の官軍未陣  
 也。義助兵と自檢して。ことより賊城を屠らむと。風と受て攻む。小降る者十五。義助大小  
 威を震ふ。あつるに。本年四月より。後助重傷小犯されて。紀居安らむ。心伸昔も大領以  
 下の官軍大小受へ。医術も盡せし。ことより。更小との強ゆ。あつる。曆應二年五月との。不覺に  
 病の爲に死せり。嗚呼惜らむ。この兄弟朝家の爲に。身を碎き。心力で。竭せし。ことより。その功と全う  
 せむ。事途小て。病小卒。事。実小縁慮の。拙。あつる。事。時。の。然らむ。む。なる。ん。

足利左馬頭義  
 氏之勇官  
 氏之宗鑑

源家氏 尉張守  
 從五位下  
 家宗 志波屋張守  
 從五位下  
 高經 尾張守  
 從五位下  
 源理大夫道  
 法名 遷部

足利高經

日帝自治元年卒  
 今安政三辰迄四百五年成

足利高經者尊氏之族也。從軍有勇守北  
 陸居越前黑丸城。義貞屢攻不克而死。於  
 是高經功名尤著。其後有故暫屬南方。悔  
 過歸仕。義詮居執事職。改名道朝。其別號  
 曰斯波。世所謂武衛是也。

高經室所家執事。子義詮。義詮子義重。義重左兵衛督。相繼で  
 管領とあり。世に將軍を補佐して。世に武衛と稱しけり。



足利高経の始

足利將軍尊氏之族ありて前小記まが如し所々の軍小吉氏小従ひ成功ありより  
 前の國尾丸の城小たれて北國の押へともまを以て延元元年十月義貞太子恒良奉  
 北國小下つて敵前金ヶ浜の城小入るがて將軍尊氏の命より高経尾丸の城に二  
 万餘の兵を帥て金ヶ浜を圍りけり。然れども義貞の勇士固く守つて拔と能はず義貞  
 顯精並より引返して金ヶ浜の後結を見とあせりとき軍士散て十六誘ふる時小栗  
 生の縁計小周て糸兵懸ける機を察し義貞故を出て逃移けり糸兵大小礼と立て  
 討つるの多りける。周て尊氏仁木頼章高師泰とむとて再び金ヶ浜を圍りむ。此  
 時の軍車服屋敷助小傳小合せて高経が勝敗武界のちととも裁言ふ今あ小登  
 言せども小文和元年の夏山名時氏の子師氏出雲國備前伯耆の兵を帥ひ先鋒とかり  
 て八幡と攻捕和田が進敵を併ふその功績ありす。自ら誇り佐々木道春の妻時

出頭言はる。之小就て若狭國今積の莊と賜らんと。道春が館へ住ける小毎夜酒宴を  
 辨てあし。師氏小會叔お先徳あると屢ちまは師氏大小憤り則伯及小討きて父時氏小  
 こと告ぐ時氏使て佐々木入道僅る功小誇り。君野と得て妻家と殖む。後あは  
 往方あり。と伊田波多野夫那小幡等の諸士と共小苦野小指で若罪責恩免あは。出  
 味方とんと。南幸大小軟びり。緒方の官軍と牒し合して不意に起つて洛を襲  
 ふ。この時義民謙舎小在り。義詮の勢微して。この大敵を防ぎざる。幸て奉じて井井の奴  
 小到る時氏師氏系に入りが。幾れどなく本國小帰る文和三年尊氏上洛し仁木頼章と  
 執事とす。義詮をて山名と替も時氏使て連冬と逐へ主將とあして南方に應じ連に  
 洛を攻んとす。この時越前守足利高経越中守桃井連常等。牒し合して京洛を攻む。  
 小叔きて山名に通じ。南軍に屬し。かて時氏を連冬常等。牒し合して京洛を攻む。  
 この時法軍義詮小従ひ播及あへの間系都を無勢なる。連冬大いしを執るとして



氏まゝ 帝と奉じて、以て武佐寺に逃去す。重光が軍時、氏を逐去す。以下、三か條に入  
 ほか、尊氏諸を攻んと、關東の兵を催し、東坂本に陳をす。義経播磨より引返り、神  
 南の北不陳を、因て重光時、氏高経等、東寺に屯して、我ひ且和田捕平、修務峽を越  
 て南の尾崎不陳する所、細川頼之、赤松則祐が陳と戦ひ、武軍大不敗をせり。則祐士卒を  
 勵まして、万死不入て、味方援ふ時、氏高経等、戦ひ疲れ、且軍糧小乏しく、國に還去せり。  
 高経遁して、國不歸り、我あつて、重光不我、に従来、是利の一族なり。今南方に屬するを  
 小愈をり、大兵を廢す。重光又倫の道にあらんと、自ら悔て、使節を遣し、そのこと信せける。  
 小高氏異議なく、許しけり。また、重光氏不隨ひけり。そのより、二代義経、持軍の世におよび、貞  
 治元年、その子重光執事となる。重光持幼年、言せり、その経入道とて、補け、滿春、日々に熾る。  
 佐々木道春と、權て争ひ、流不渠、流不罹り。彼前不遁、是討ひて、向へて、その故を固く守り。  
 降らざるを、教月、及び、月五年秋七月、關戰のち、不病、卒に

足利陸奥判官  
 義康二男

源義朝 細川三郎

頼直 細川三郎

頼貞 日八郎三郎

頼氏 細川小四郎

從四位下陸奥守  
 定禪 若宮判官

宮内卿

細川定禪

卒年未詳 起元の役大功あり  
 今安政三辰迄 五百二十一年成

細川定禪者、嘗以兵五百勝敵二萬、雖寡不  
 當衆、然有時而偶然、予其餘戰鬥、猶有焉

ホソカハ、ガヤウゼンハ、カツテ、モチヘトゴヒヤカツ、チキニ、マンニ、イハセ、クハ、スト  
 アタマシキ、シカモ、アリテ、キ、ダウ、ゼン、タカ、ソノ、ヨシ、セン、トウ、ナホ、アリ、コン  
 卒年未詳 起元の役大功あり  
 今安政三辰迄 五百二十一年成  
 後醍醐天皇北條氏の誘着と怒り、天下に令て下、護良親王とて援け、新  
 田足利捕以下、諸軍の官軍競ひ起り、一時に鎌倉を滅して、天下統一のひけきと。  
 賞罰正しくするを、赤松同心等の對おも、忽ち叛き、難はに及ひ、細川定禪  
 も、濱州小起ると、既に系河に、い、ことより、高尊氏叛き、大軍を率て上洛  
 せんと、四海の朝敵蜂の、官軍智將武勇ありとも、こと拒むに所なり。  
 嗟一将の口弁より、枝桑修羅の、尚とあり、



細川定禪の結

從四位下陸奥守細川顯氏の弟なり。少きうて髪を削る。後金若宮の別當と成  
 卿津師と稱す。相模次郎時行札を伝及小記をよみ。紹命を受けて足利高氏と  
 是を伝代する。制定禪浮屠の身あり。このど別当山で條衣を好まざる。時節で  
 幸ひして足利高氏と共小足利直義に従ひ時行を替て勇て死す。是より後遷俗  
 て本國總持小居伯一。この時機と窺ひたり。高氏系師を犯さ小及び兵と記して是  
 小應志。關西の莊に軍す。舟木頼重と敗つて。四國備前悉く定禪小應下ける。  
 定禪と直より威勢と漲て。中國小跋扈せり。かくて延元元年正月の役高氏の兵兵上落  
 以新田兄弟補以下。直と新に防ぐといふも。官軍竟に利あり。主上散心に  
 避する。この時火を放つて内裡を燒き高氏遂に洛小入。定禪をて二井小居ら  
 一。あ山門を窺ひ。幸紹して後貞正及顯家の諸おれ命。二井小在。所の定禪で

替しむ。其勢於て六万餘騎なり。山佐二万餘騎奔軍して。如玄山小軍。後貞が先鋒千  
 葉大徳火を繼つて先登。定禪が兵万死小入。直と防ぎ。敵小より千乗新分。高  
 以死。官軍強潰え。後貞が千六騎。栗生條。條畑。畑の四天王。皆突出。圍と折。山門  
 を破る。小居て定禪が兵防ぎ。兼て援札。官軍勝に。兼て城小入。佐山佐山より突  
 撃に。敵軍大小後頼。深谷小漏つ。没死する。の救千萬。官軍首と獲る。七十餘  
 級。定禪頻に敗る。て直と措新。高氏定禪と援り。為に二條河原に。出ける。と。直  
 貞城を。遊て。小居。高氏兵を。進め。鞍を。響と。海と。直と。戦ふ。後貞。精銳。二十。を。選  
 二。五十。二隊。となり。敵小。紛。是。て。その。軍中。に。依。り。め。ける。が。機。を。量。て。相。當。を。る。を。依。兵。弁。く  
 後小記は。高氏。強。き。以。為。我。軍。敵。に。應。下。ぬ。と。大。小。潰。え。て。兵。當。奪。は。後。貞。と。直。と。遊。ぶ  
 と。急。かり。高。氏。丹。波。に。奔。り。橋。津。に。到。り。高。馬。童。小。斃。す。る。因。て。鞍。を。援。き。自。殺。せ。ん  
 と。高。都。筑。某。馬。より。下。り。高。氏。小。授。け。を。ら。す。む。祝。に。日。暮。て。後。貞。の。兵。を。屏。り。洛。小。懸。ふ。





百將傳

〇十五

群  
玉堂  
藏  
板



賊軍  
如意山  
深谷  
墮  
没  
圖

百將傳

群  
玉堂  
藏  
板

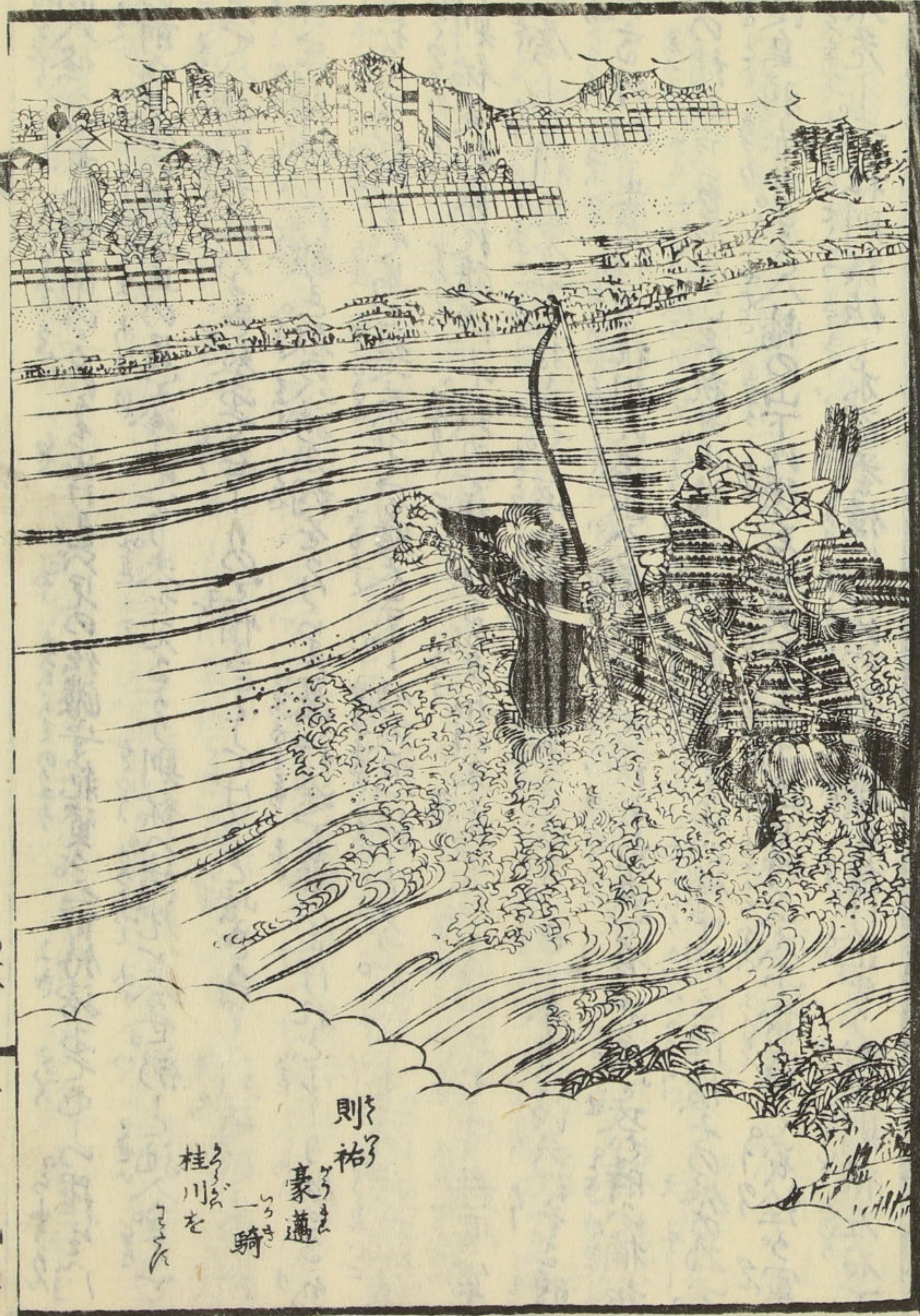








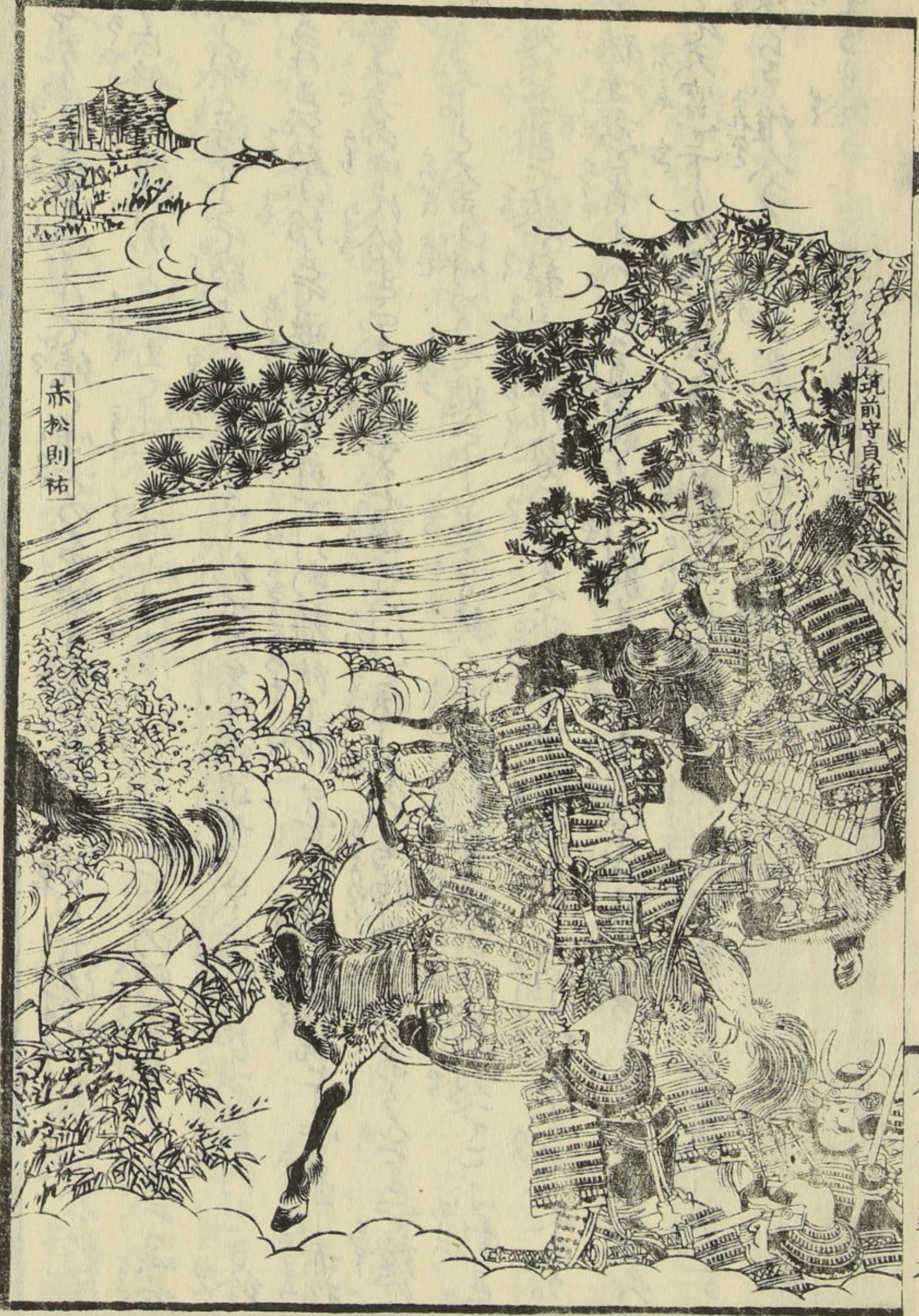




〇六

群玉堂藏板

則祐  
 豪邁  
 一騎  
 桂川を  
 つる



赤松則祐

赤松則祐

群玉堂藏板



西八條の寺の前南の方より出けし六兄の信濃守範資が。二百餘騎を屯一の羅生門  
 の前より水の隈小馬の足と冷してより夫をえりより則祐の諸將と合せ。衝と池入る。是  
 して八騎の兵仗のよき敵を在一ののて惜きこととげり。と吐きあがり引返いと七。則  
 祐と一騎味方に離れ敵の八騎小切をけり。是落行途と慕りまけれど。少くも腹せる氣  
 色なく。乃所志馬と逐て来つとる。膽太き。と破入舌と拵いとあかて。建武の擾亂以後  
 八則祐是利家に隨從して。戮力と竭しける。文和四年未正月山島時氏是より。爲官軍  
 に屬し。是利連を主とて。上洛し。尊氏兵の寡きなり。奉て奉とて。はやくはる。時  
 氏。是利連直常。井等相俱に洛不入。同き二月。子氏。義詮。兵と合して。系と攻む。時小楠。和  
 國の諸將。吉良。石堂。山名。桃井。小幡。淺沼の勇將等。ま。四條中納言隆俊。その師の將士  
 渡鳥羽。赤井。ま。八幡の山下に陳ちて。武軍。大。小。挫ぐ。時氏。大。小。奮戦して。義詮が軍  
 殆危し。赤松則祐。佐々木。通。義。僅に。百。騎。可。少。と。潰。を。援。け。止。ま。り。我。も。則。祐。左。右。と

顧て天下の大車。この舉あり。何ぞ我死と苦。若くは後世。小。注。め。ざる。と。自。身。を。執。て。勝  
 終つる。敵。の。中。に。池。廻。り。縦。横。に。蒐。集。する。従。兵。士。則。祐。が。勇。氣。小。憤。ひ。励。ま。さ。れ。必。死。を。決  
 め。我。ふ。わ。た。し。の。海。の。官。軍。大。小。札。を。討。つ。る。の。若。子。に。時。氏。も。ま。創。を。被。る。赤。松。が。兵  
 勇。氣。を。倍。し。面。面。揮。ぎ。突。戦。し。時。氏。殆。危。し。と。其。長。河。村。陣。に。ある。老。將。を。訪。て。討。死  
 せ。ま。この。間。小。時。氏。の。老。き。を。脱。け。り。こ。こ。より。南。軍。利。を。失。ひ。坂。本。に。引。退。き。夫。より。統  
 て。攻。撃。せ。り。不。緒。お。こ。す。國。小。切。り。將。軍。洛。入。る。ふ。こ。こ。に。偏。小。則。祐。が。小。勢。を。以。て。痛。止。ま。り。  
 万。死。に。入。て。我。ひ。一。より。敗。軍。還。て。勝。利。と。さ。す。こ。こ。に。則。祐。が。勲。功。あり。是。より。後。義。詮。將。軍  
 の。治。世。康。安。元。年。冬。十。月。細。川。清。氏。の。二。子。と。て。石。清。水。の。八。幡。小。幡。で。社。前。小。於。て。元。服。す。  
 兄。を。八。幡。六。郎。と。号。し。弟。を。六。幡。八。郎。と。号。す。義。詮。と。して。憤。り。その。本。意。を。傳。ひ。よ。依。り。本  
 道。義。の。時。を。幸。ひ。と。して。終。り。け。し。後。詮。と。して。殺。さ。れ。と。清。氏。は。時。氏。大。小。幡。を。洛。で。去  
 て。南。方。に。屬。し。楠。正。儀。と。兵。と。合。し。て。急。に。洛。を。責。げ。し。が。義。詮。防。ぐ。と。松。平。氏。奉。て。奉。ト



ては及小退く。時後滿四歳少く洛小猿より一と則祐乳母に懐きて。東山小志ひを  
 ちと播及白旗の故小清侍。その翌年車攻り。飯洛の資を計らる。是足利家  
 二代將軍に大功あり。是より後評定衆とす。その人ハ誰ぞ山名伊豆守時氏  
 赤松時則祐一と左系大夫詮範依と本六角判官入道崇永の四人なり  
 按るに時則祐父と共に親家小坂さくむ武將小黨して後志を改め足利  
 氏の為小忠誠を盡し尊氏費トの後も備忠節の義と美のむを奉りて由を孫  
 満祐小至り將軍派の事ありと憤り怒とて匿して第に清く。是を殺し奉りて  
 領地小出奔以て山名持豊を以て殺りて。是を殺し奉りて。満祐防樂の御つれ  
 て竟小自旗の故小自盡せり。その記原は祐が領地を割て伴夏も貞村小受  
 んとするに因る。祖父とのひ孫とのひ領地小周て君に冠以て國とのひさる。と後  
 播きとるるは也

足利義満  
 男桃井遠江守義隆  
 源直常  
 桃井播磨守  
 直和  
 桃井中務常滿  
 実直常孫  
 直弘 同二郎

桃井直常

人皇九十九代 後光嚴帝貞治五年卒  
 今安政三辰迄 四百二年成

桃井直常者尊氏之族也。曾師楠正成。學  
 兵法。建武之乱。屢立戰功。既而屬南朝。或  
 進攻京師。以破義詮。或退據越中。而守城  
 壘。凡所到。顯其名。

人物掌覽を撰るに。桃井直常ハ足利義康の裔なり。高祖父義胤始めて野桃  
 井に居る。故小その比名を稱號とて。子孫因て氏とよみと見えたり



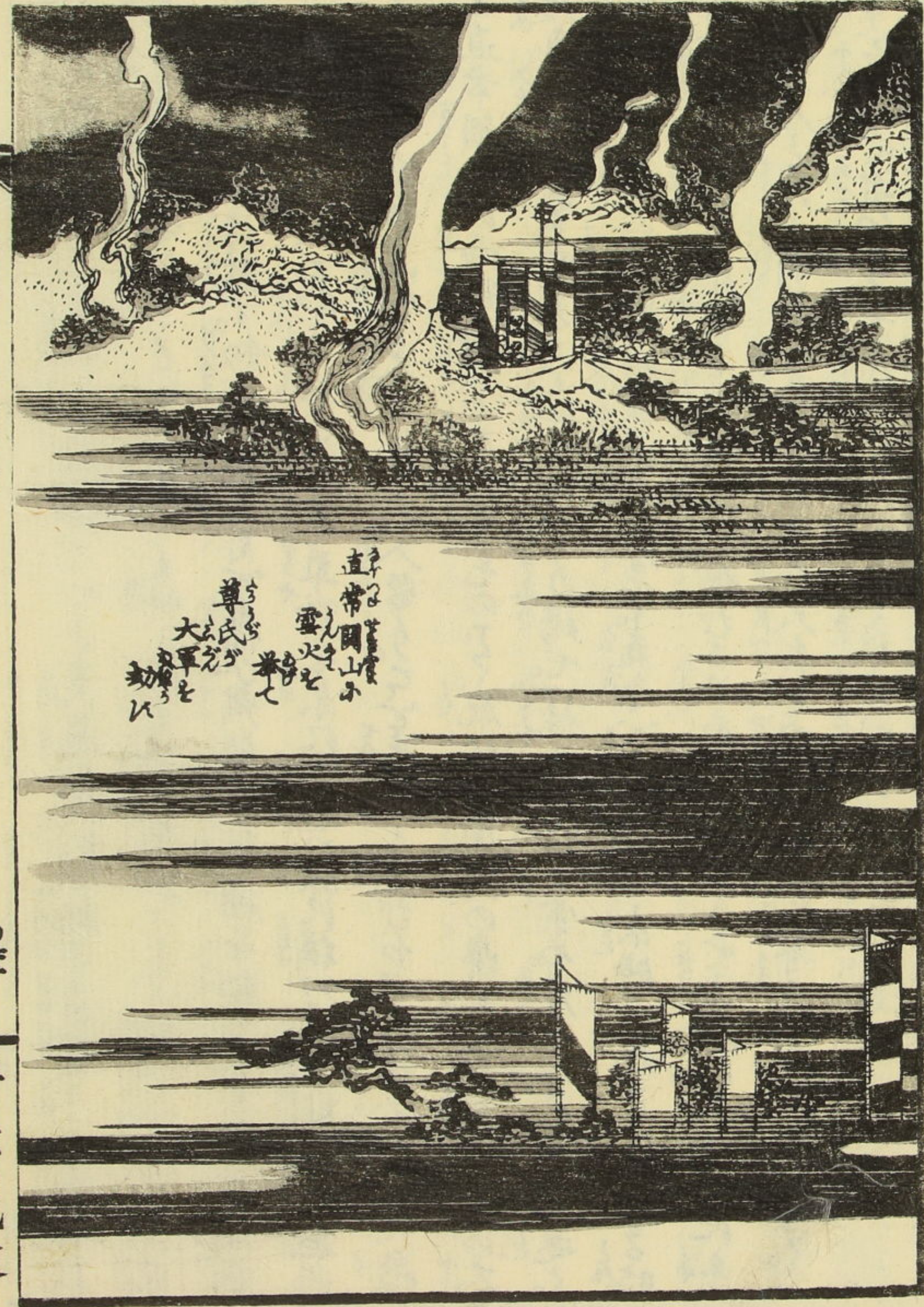
挑井直常の結

書にのりて名義時若北國を兵と奉加及大聖寺にありし。この時並常大將として方便を以て討平ぐ。是より良將の望ありと云

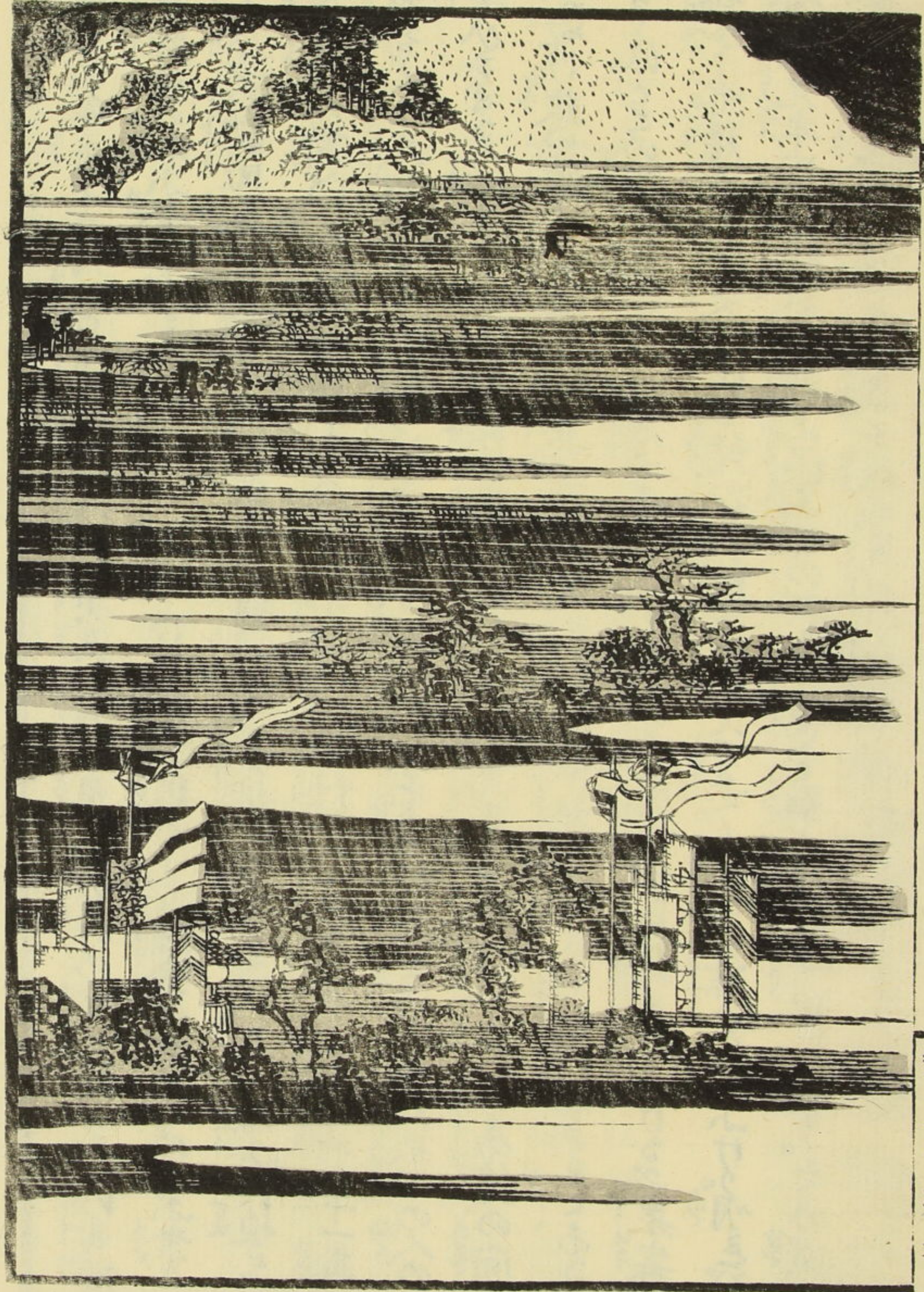
按るに當時城中の守護の系圖のそく名義遠江守時有也。元弘三年五月十七日城中二隊ありて討死とあり。その名義修理亮有公の兄とす。所討死と録せり。その先北條の向小四郎義時の子名義成。成於承和時より出たり。蓋時名との者二人あり。一人は名義の氏遠江五郎左近大夫の孫と見え。元弘三年六月六日波羅とあり。時の子にて從五位下尾張守時兼小侍所の別當正安二年六月六日波羅とあり。又元弘三年六月六日波羅とあり。直常成功あり。より尊氏も重く用お給。経鎌倉不在のとき。是を守護と在るが。

建武四年冬十二月北畠中納言顯家。奥及の兵と率し。芳野の宮に臻るとい。経鎌倉の所小本下。とて利根川小防がむるに大敗せし。鎌倉に帰るとの時。小本下と及ぶ。新田義興を奉て顯家に合體し。顯家倍極威を奮ひ。既小鎌倉に迫ふ。及び挑井斯波高上移る。始くとる。既を遊後日。計つて死せんとす。経時小十一歳。我苟く由大樹の子として敵の法きとて。我亦及ぶ。是を遊し。天下の人の笑ひをさる。如く。爰も敵を防ぎ。運竭む。戦死せん。若幸ひに脱する。房總の向小逃げ。敵の後より上洛し。兼兵運ひ。兼亦及び。我軍援え。とて。経は勝る。とある。つぐ。つぐ。この一言に。既まされ。衆も。このことを。然り。とて。防衛の備をかりける。が。衆寡併ま。し。鎌倉の軍大。小潰る。緒を。経を。携り。え。走り。顯家。鎌倉。小入り。つ。つ。元弘元年正月。顯家。兵。上洛。と。その兵五十萬。と。辨。辨。旗。千里。に。翻り。その威勢。遠近に。振。行。海道。の。衆。を。収。め。民。を。抄。掠。し。郡。縣。と。ま。が。つ。小。退。破。社。堂。是





直子  
常陸  
雲火  
山小  
尊氏  
大軍  
勅  
以



百景集  
分言者之十

君玉堂藏板



が為に放火せしむ。民人大小苦むといふ。かくて美濃に到る。桃井連常土は頼遠に  
 兵を集め後と慕ひさりの大兵少しも併せば青野が原にてとて殺ふ。直常躬美先  
 小連を執て搏殺す。剣先迅雷人目と復ひ我ひの勢。神油を動かひ。とて不周と頼  
 が兵替はりの殺て知らひ血の流して草野を赤に。骸の踏に横りて宛然。れ。森の  
 下。然。まども目小なる大軍ある。とて先途と挑む。わどに鎌倉勢大に疲  
 色直常頼遠の両将也。直小立矢。暮七の。既。に殺箇所。の。傷。と。負。て。黒。革。織。の。大  
 直常。頼。遠。に。交。む。る。と。今。の。あ。つ。力。竭。て。一。條。の。血。路。を。索。め。た。う。と。と。通。と。退。く。  
 是より後文和二年山名時氏南方に奔り。直を主とす。系師を祀さんとす。時  
 桃井連常の賊中に在り。亦尊氏を憾むる故あり。因て殺さる。山名に應下。俱に系  
 師を攻んと約し。明。文。和。四。年。の。春。大。兵。と。率。て。上。洛。を。尊。氏。と。と。防。が。く。  
 系と奉とて近江の武佐寺に隠さる。直常時氏洛小入りが尊氏再び關東の勢

を聚めて洛小入る。後詮も播及より。引返して洛小入る。小放て時氏連常。和同捕るが  
 軍と共に逐ひ撃つて勇とあつた。然るに赤松律師。則祐。血。殺。し。て。軍。で。敷。南。軍  
 大に。我。の。功。は。山。名。時。氏。桃。井。直。常。是。利。の。後。兵。と。引。て。各。本。國。へ。退。去。せ。り。この。後  
 我。あ。つ。た。は。つ。て。尊。氏。小。降。は。此。後。頭。家。を。ひ。き。き。置。別。祐。が。小。傳。小  
 按。る。に。是。より。高。原。利。左。衛。門。督。直。義。系。師。小。在。て。政。を。執。り。高。原。連。師。泰。の。兄  
 弟。功。に。誇。り。て。驕。り。直。義。憎。を。殺。さ。ん。と。以。事。突。号。し。て。師。連。兄。弟。直。義。を  
 討。ん。と。柳。實。と。圍。む。号。氏。諭。し。て。直。義。が。職。を。剥。ぎ。師。連。が。怒。つ。と。宥。む。直。義。捕  
 り。と。と。恐。れ。別。置。し。て。惠。源。と。号。以。干。時。貞。和。五。年。十。二。月。之。終。る。に。師。連。が。怒。り  
 止。以。密。に。殺。さ。ん。と。す。と。傳。て。系。洛。を。遁。し。和。及。小。入。り。敵。智。伊。賀。守。が。家。に。隠。し。て  
 便。を。遣。り。て。南。朝。に。降。る。南。朝。の。統。御。穿。議。あ。つ。て。竟。小。勅。免。の。宣。名。と。賜。ひ。惠。源。と  
 南。朝。の。將。軍。と。し。以。觀。應。二。年。卯。正。月。惠。源。捕。り。と。兵。を。合。せ。七。千。誘。て。乃。て。八。幡。小



陳以この畠山河波為監十餘誘を引て南方に降す。桃井連常敏中より臻す。惠  
 源を援けて南方に屬す。敏山不登のとき、雄中を短く殺し、經幾人と歎す。且も兵の  
 寡きとて、東洛を退く。時小桂川にて尊氏と西より争ひ、小逢ふ。後詮喜は尊  
 氏と兵を合して、隊伍を分ち、洛外所に軍以、桃井連常ととて、彼自より七千餘を  
 率て東山を背に、腹不賀、辰川をきて、敵を待ち、仁木細川が二万誘、小逢ふ。連常、應  
 我良久、老じて、敵を討て、數百人をとり、猛威を震ひ、聞ふ。時小佐木入道、道譽具  
 山の南より、連常が後、小出づ。直常が兵、急き、渡り、桃井大お、とて、勇氣を励まし、  
 前後の敵、おさる。と、救回八幡の援、兵も、も、臻らば、連常、大お、我ひ、疲、東山に  
 上らんとす。氣、小お、と、尊氏の兵、二條を、東に、出、序、路を、絶、つ。直常、敵を、二方、小  
 受け、防、敵、ま、と、往、い、さ、ま、と、日、未、の、勇、猛、を、彰、し、て、吾、來、る、敵、を、ら、ち、併、ひ、摧、倒、し、て  
 走、り、出、關、山、小、陳、一、燐、を、列、祀、と、ふ、天、の、明、を、候、尊、氏、も、軍、を、緩、め、城、内、の、侍、方、臻、ん

と。とて、候、ども、曾、て、臻、ら、む、と、多、く、桃、井、が、勇、勢、と、て、惠、源、が、方、に、屬、し、け、ば、  
 尊、氏、父、子、戮、力、で、失、ひ、尊、氏、の、西、國、に、兵、給、の、丹、波、小、逢、る、夫、より、復、敗、軍、一、榮、師、寺  
 公、義、が、防、戦、小、周、て、湖、松、岡、の、城、入、と、然、兵、落、散、り、て、力、を、失、ひ、尊、氏、總、督、庭、を、使、と、て、惠  
 源、と、和、睦、あ、さ、ん、と、精、進、惠、源、と、と、肯、ふ、お、う、已、に、と、洛、小、入、る、然、に、仁、木、細、川、土、波  
 依、り、本、營、の、黨、と、立、尊、氏、小、仕、て、惠、源、を、傍、む、ま、上、杉、石、堂、桃、井、尊、氏、と、謀、り、惠、源、小  
 逢、ま、し、に、威、功、を、奉、ひ、て、是、より、復、見、才、不、和、あり、惠、源、難、の、至、ら、ん、と、思、ふ、と、系、と、出、て、紙  
 前、小、逢、は、尊、氏、法、お、を、し、て、是、を、替、り、惠、源、難、と、謙、念、に、通、る、尊、氏、躬、軍、と、帥、以、後、及  
 濟、埜、山、に、至、る、惠、源、大、兵、と、以、て、圍、む、と、い、ふ、も、竟、小、敗、を、し、尊、氏、小、降、つ、と、夫、より、謙  
 念、に、伴、ひ、鳩、殺、せ、し、て、小、お、死、ぬ、軍、敗、り、桃、井、連、常、敏、中、(退、き、)が、文、和、二、年  
 山、名、時、氏、系、師、と、攻、入、と、す、時、小、南、方、に、屬、し、う、と、の、事、既、に、前、小、以、り、  
 かく、後、貞、治、元、年、足、利、直、冬、主、お、と、し、山、名、時、氏、伯、耆、より、起、り、美、作、小、赴、き、吉、備、の、二、次



其石見の緒成を降し中玉に跋扈せり然るに官下野入道一人是を拒むに至る軍不交に  
 起りて直を放し本國へ歸りけりこの時連常佐濃小記の直冬に應ぜんと以加賀結老  
 前前の兵とて拒ぐ直常例の極威を震つて三州の兵と替ち勝つて敵を於て以て  
 加賀の降人等連常から野を討つて火を放ててとて終つて直常大小梅樹一過して井の  
 誠不入こ小於て中國北玉奇く敗老して官軍傲くとする然るに斯波道朝前死  
 一その子義將降系いと父とも耻て東洛へ至らざるは後給將軍將小桃井連罰の  
 ことを命以て後將軍とす一桃井直常と替んとし連常防戦の力猶也松余の協小終は  
 致るるは病を發し終小松余の誠小率以て後將軍を得て國内を畧し北及多々後將に  
 屬し將軍賞して越中の守護とふいと傳へり  
 附ての良利家の結成成ひの南方に降り復武家以て以連常一旦武が小叛き後  
 その志を更ひ餘の徳をうりてとて入且六勝するに遠く一と一と一

新撰 炊助 義重  
 二勇山名冠者義範  
 六代

源政氏 山名小二郎  
 入道  
 時氏 伊豆守  
 從五位下  
 添名道靜  
 師氏 右衛門  
 推佐  
 義理 修理大夫  
 紀伊國守護  
 氏冬 中務大輔  
 早世  
 氏清 陸奥守  
 以下畧ス

山名時氏

辛年未詳貞和三年因伯西丹作の五箇國を領し  
 今安政三辰迄 五百十年成

ヤマナ トキウヂ ハ タカウチノ シヤウナリ シヨクノ グン コウヌ スチカラ  
 山名時氏者尊氏之將也處々軍功不少  
 イツモ ツクシ ナン ハウニ ト アシカガ シ アヒ タカウチ アリ トン ソノ  
 一旦屬南方與足利氏相戰者有年其  
 ノチ マタ サツテ クダラ ナル ブ シト  
 後又去官軍為武臣

按るに足利家の世治のとき後家祿及び由緒を以てその職を官の山名細川下屋  
 一色白山能登 佐々木極の五家を所相伴衆とすこの時將軍家清家へ入府の時  
 所先へ入り向ひ所座に眼近しく進退に隨之加まらば股肱羽翼の長き他門と  
 みて格別こそ小形紙あるとてこれを記す











新田義興の伝

建武四年冬十二月北畠顯家奥州の兵を率へて上洛ひたの時鎌倉の諸將相模川に  
 きて防ぎて敗れ退く。顯家尋で鎌倉小入りとし新田義興上野に居る。この時  
 きて時至りぬ。國中の兵二万に督し顯家が威を振く。是を以て關東の兵旄を  
 荷ひ戈を杖て来つて居まる。の雲霞の下り。をさうり直に鎌倉小迫る。後詮防ぎ  
 入て能く逃亡するに困て鎌倉小入る。その翌曆應元年正月顯家長興鎌倉でお  
 立連小芳野へ向ふの時美濃の國青野が系忠と桃井等と闘戦し。ことを救つ  
 上洛ひ尊氏親と諸將小命。上洛の思慮地小迫る。顯家路を杖て上洛小至り。桃  
 井並率等と接戦し。大敗して遁走する。この時顯家の弟顯信新田義興散卒を  
 聚め八幡の城小捕獲る。高師重とて圍を抜んとす。と義興等固く守つて援を  
 乞ひ顯家とて救えり。と。まゝ大敗を。安倍野小戦死するに及び八幡小力と失

ふ。天竺とてを以るひ義助をて救ひ。義助救負不到るとき。八幡に火の籠るを  
 見て。とや城に落る。と途よりとて返り八幡の城の中へ克く救を掛ぎて終にその  
 時敗らば。然とても援を盡す。外小援の兵に至り力竭て義興顯信小入りて城を  
 落けり。この一件の顯家及び長年義助の小傳小性とをえ。と。小大畧に於て義興  
 義宗義興の二男義治義助の長子の時と俟て武藏上野越後信濃の間にあり。然るに今歳文和二年。  
 正徳顯信系洛を攻て後詮没落し。と。及び一族及び交結の衆八百人を催して西上野小  
 旗を率へ。と。して。關東の兵招き。集りて。義軍に應ずる者十方誘進んで武藏野  
 小軍に尊氏破て大小撃。鎌倉の兵数万を率て。と。と。逆ひ。戦ひ。と。新田の伯と新小あり。  
 尊氏が先鋒總督命鶴。と。に對し。戦ふ。処。と。戦小敗。と。これ相蹂躪。と。て。引退く。尊  
 氏二陣を入更らせん。と。指揮あせと。前軍の礼。と。引く。隔り。と。後軍敢て進まが。新  
 田義宗諸軍に先。と。天下の為。と。の。初。と。敵。と。り。我。と。為。と。は。父の。讎。と。なり。今日尊氏が首を





新田十右衛門

〇北九

新田十右衛門

竹沢



義興  
欺  
竹沢  
信

新田十右衛門

新田十右衛門

新田十右衛門



看む六何の時を期すまきと大木呼あて怪不持退ふ尊氏御計焉不廻て始るを見  
 えけし馬廻りの兵を且て防ぎ我死する者千餘輩尊氏御く虎口と通し石濱に引  
 退く義宗も捕逐ふて急なり川を涉つて岸に上るこの時靈曜は西に波し黄昏となり  
 けはばと見まきと義宗の兵を還志て追ぎりけし尊氏令て全うせりかて白旗堂  
 の兵敗をよみて遂にえて義興義治の尊氏が逃るなりとをひとる諸燈を合せ隊伍を  
 こまを連ふと五十餘町あるは小の城に小澤未する者此処被処より出未る者大木に廻る  
 るとに義興義治馬を往め避匿するて数回まの板に先陣の兵小波るとに教里に及びその  
 勢僅小二百可るあ不仁木頼重及び同く義長との城に敢なく味方の敗を愧旗と  
 振き鼓を伏せ敵の勅辭を窺ふか小勢にて懸るをり之時を得てまに輩原より  
 俄に奔つて千餘騎押え給て攻るる義興が兵不支て替は殊に我に疲まるとり衆寡  
 元より件あはばあまじどの勇威を養ひ一以て十に輩の奮發突敵乾坤辰初血流草

野に波まらう叫き喚びて我ひけま大勢不持ま五らと敗て東の方を奔る者  
 興義治馬を往め落来る味方と急檢するに百騎ハ討まるとり見え残る兵二百騎可  
 且く懸ひ供ひかりをまらふ不兵寡く殊に我に疲まるとり上野少の坪をぐる同く  
 死さる縁念に入る基氏と雌雄を交せん不男と大木の言葉も畢らば一容に懸る  
 べしと向きけり然らむとひて兩大物縁念を斥てあまるとに開戸を退て石堂に備二  
 階堂に投下騎を率き西歩きるに逢ふて大木執ひ是より各一名となり縁念押身  
 南邊にちこま防を義興躬銃軍に先を陳を破り敵を斬る義治由ま力我にこふ於  
 て縁念勢大不潰て南邊に守基氏を扶持し石濱に逃ま奔る義興義治縁念に入ると威威  
 を關東八州小震るこ小新田義宗八本國の兵二万を率て尊氏を撃んと石濱に向き  
 氏を諸ねと續しまづ義宗を連ひ替んと躬八万騎の兵を率し義宗に相對し自旋天  
 懸る時あはぬ雪の如くまは白雲のまらに似る雷鼓群箭耳目を驚く義宗衆を



揮きて倍次侍を下て我ふ勇銳比ひあらずとも衆寡の兵力相對さば一戦小利と爲  
 ろふ侍を殺て散れせり。尊氏ことと遊以と久ど。まゝ鎌倉に大敵あり。まづこゝを攻  
 り如くと垂小鎌倉へ推考る。義興義治僅小八千。死を鎌倉小変せんと少し由勅せし故  
 侯の松田川村の一族等この腹さる兵とて十方の衆にまゐりて鎌倉をさしに似たり。まづ  
 敵の銳氣を遊系助の姿を窺ひて秋法信濃の兵と促し。我れあゝ悲々く矢と面を  
 冒して練ゆけしと雨のこまを怒りて。石堂小保二階堂華名之浦の輩と共し鎌倉と  
 去て相換の玉河村の里小入信尊氏我れとて勝と父ど由。故猶遠く退り火不無の憂  
 あらんを察し。鎌倉に兵と備ふ然る小義興義治の再びうちある力なく。仍て空くあん  
 せいと文和二年とてまゝと秋後小降りて城郭を築き義興義治の將と小據  
 て便宜を窺ひ脱小文安二年となりぬ然る小武藏上野の輩後兵と奉んてを勅む  
 義興大に歎びて。舟從百餘人を率ひ密に武藏國に到る。小新田小好とありまゝ畠

山道營に恨みあるの流のまの義興小屬んとすあそ再び威勢焉小崩せり。このと早く  
 自棄せし鎌倉にゆえしと道誓大小謀りて一計を案ト出し。その名竹澤監物と  
 足下彼年義興小屬一屢成功ありとす。今我小屬はと父ど由。後興かゝるは足  
 下と捨し渠を誘き殺さる者足下の他小あ足るは若ことを圖り謀せし厚くことを  
 費せんといふ竹沢頼に領掌し。そとより詐つて小罪を犯し。道誓の怒つて小觸して所  
 領を没収し。鎌倉を逃放る。竹澤鎌倉を出て武藏に到りて義興小をえてつ。在  
 下聊の遊あると道誓怒つて非道に辜ひ在下深くこゝと恨むより。舊好を忘るは  
 まの在下まゝを保護し。この命に代つて前日の罪を贖はんとす。けり。後興始め  
 らぬ。心仲さるに新せし然るに竹澤こまよりして朝暮老實に義興小仕へ。或時  
 美酒佳釀を献下。まゝ或とき美女を進めて。他事ゆゑ小仕ふる。稍半威存  
 にありぬ。こふ放て義興由。ゆゑに心を弛して始めのごく疑わざ。こふ放て竹澤の謀計



成統の今孫金の島山道誓四方に敵のあつたとして武備小怠りて其に耽る。其の時  
 公兵を記さば一挙にして敗つ。公孫金へ入るべし。武蔵相模及び上野の兵招  
 くるに未だ。頼朝が兵を奉ると勅む義興を怒りて。頼朝延文二年十月武蔵  
 をきて同まゐる。矢日の渡に到る時竹澤津で船底に穴を穿ち栓をさぐり。河中に至る及び  
 舟子と討つとて。抜く水忽地小波を入て。義興主従六小旗。于時江戸邊に同下野守之  
 百餘。河岸小備へて。船中奈何とも。下野守兵井井。彈正忠大島周防守世  
 良田右馬今由良兵衛少相共小自殺。船即倫没せり。後義興が死を索め。首を斬  
 て竹澤江戸孫金小護送せり。道誓二人が功を賞ひ。かくて江戸氏莊所小住んと。矢日の渡  
 上に来る。とき迅雷疾風波急なり。大小も上流小向ふ。この時義興甲冑を著し。白馬  
 に跨りて雲中へ現れ。弓を以て射ると。入る。旗を馬より墜七日に。遂に死す。その後種々の  
 怪異あり。但人為に祠を建て。新田明神と崇め。祀る。今猶その社蹟存せり。

藤原姓 菊池

武時 菊池入道

探題英時 戦

武重 肥後守

武光 肥後守

武政 肥後守

# 菊池武光

辛年未詳

菊池武光者姓藤氏西州之勇將也

父武重之志能輪勤王之忠拉少貳摧

大友劔宗像掠島津九州望風而畏靡

元弘二年兼池武時入道寂阿義小掇て其を記し。先主太宰少監則隆肥後の兼池  
 郡を賜ふ。孫封を授け。世傳あり。武時義興を記し。九州の探題北條英時を攻め  
 して出陣の時。及び樺田の祠を造り。馬蹄の跡に。武時大に怒り。今王室の  
 為小兵を出し。怒る。馬を注む。こを極て邪神あり。と。鑄夫を抜て祠を射。馬  
 へ進む。こを果て。社前に蛇の死するあり。と。



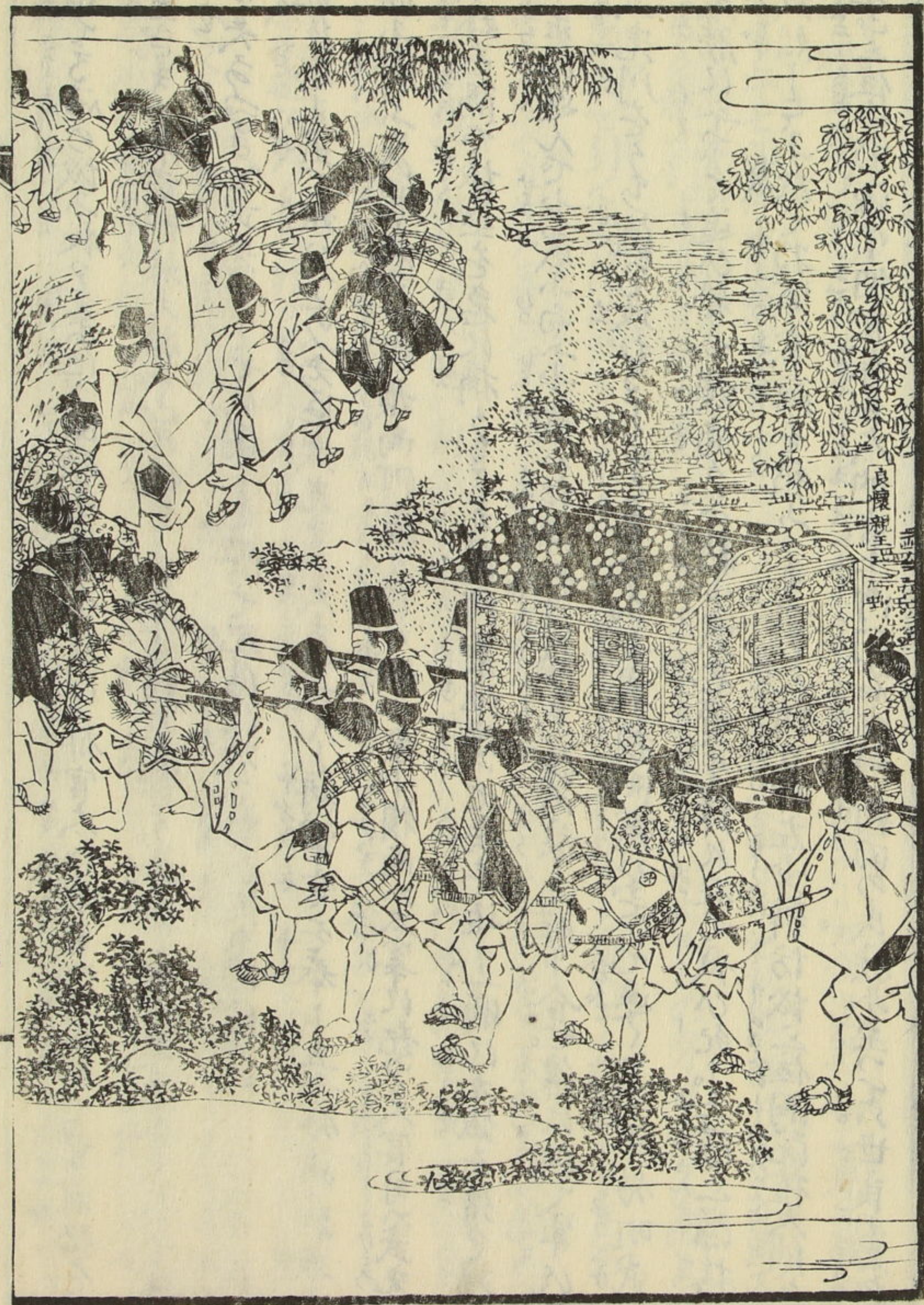
菊池武光の節

武光が祖父武時たけときの脱に探頭英時えいときと戦ひて軍利ありて子武重志たけしげを  
 継いで戦勢を張る。或とき義貞よしかげに従ひ箱根竹下はこねたけしたに尊氏たうじを討ちて戦ひ利ありて  
 して諸將と俱に浮浴ありぬかてその子武光たけみつの世におもひ猶志なほしげを改め王室わうしつを復す。國  
 らんとすこと南朝なんてうに威權衰へ衆人僉武光たけみつが私に威を張るとも人心にんしんを復敢て  
 致せばこも放て芳野殿よしののどのへ使者を進らせりて奏してつら。筑紫二道つくしにちみちの朝敵あそは大方攻魔おほまに  
 としども大將の坐さる故動もまよひ及履して人心にんしんに服するては願ふ南朝なんてう親王  
 早く山下やまのした向あつて官軍くわんぐんに力を副へ賞罰嚴重しょうばつじゆうじゆうに平なの西海道さいかいだう王威わいに順き諸將  
 退散して靜謐致さんと必せり。とこまの軍事ぐんじ悉く奏聞そうもんに及びけり。南朝大  
 小將せうしやうあり則先帝すんでい第六の皇子みよこ良懷親王らうわいしんを筑紫つくしに下し。征西せいせい將軍ぐんじんと爲奉は  
 按るに諸書異同あり。良懷親王らうわいしん征西將軍せいせいぐんじんとして。肥後ひごに迎へ奉は。延文二年えんぶんに

ありとの。後太平記ごたいへいぎは南朝なんてうの元徳二年げんとくに芳野よしのの皇居みやうきよを出のひて筑西つくせい下向げかう  
 のつとの思ふ不元徳ふげんとくとの二年に芳野よしのの皇子みよこを筑紫つくしに下し。延文二年えんぶんに南朝なんてうの正平十  
 二年しやうへいじふに建徳けんとくの應安二年おうあんに筑西つくせいの建徳二年けんとくに菊池武光きくちたけみつの計けいひりて  
 良懷親王らうわいしんを征西せいせい將軍ぐんじんと爲奉は。國史こくし畧の細書こさうにも皇明すうめい通記つうきに曰く。大  
 祖そ洪武四年ほうぶに九月くわつ日本國王にほんこわう良懷遣使らうわいしん朝貢てうきんと見えり。と奉は。とこ  
 要ふきと多。異同いどうを奉て便覽べんらんに備ふ

かて武光たけみつが威勢いせいは虎この如ごとくを副たへて。色いろを抄せう掠りやくし。探頭たんてう一色いしき連氏れんし及び才範さいはん光  
 をも攻傾せうかへりて兩人にりん戦いくさをて洛らくに降くだる。將軍ぐんじん家相けさう強かえりて細川ほそがわ繁氏はんしをこま不代ふしろり。總  
 西さいに赴おもむき。繁氏はんし途みち中なかつに病卒びやうそつせり。この時とき新田しんたの氏族しゆしゆ及び南朝なんてうに共ともするの兵へい多おほく  
 孫まごで武光たけみつに屬まがり。武光たけみつは威いを張たて山やまを越こえ。浚しゆんを浚しゆんす。日向ひやうか小入せうにりて畠山はたけやま氏し少彌せうやが  
 筑西つくせいの二侯にこうの城じやうを攻せむ。畠山はたけやま防ぼぎ難がたく。深山ふかやまに遁にげる。大友おほとも利とし次しげ大捕おほとら氏し時ときを復たす。

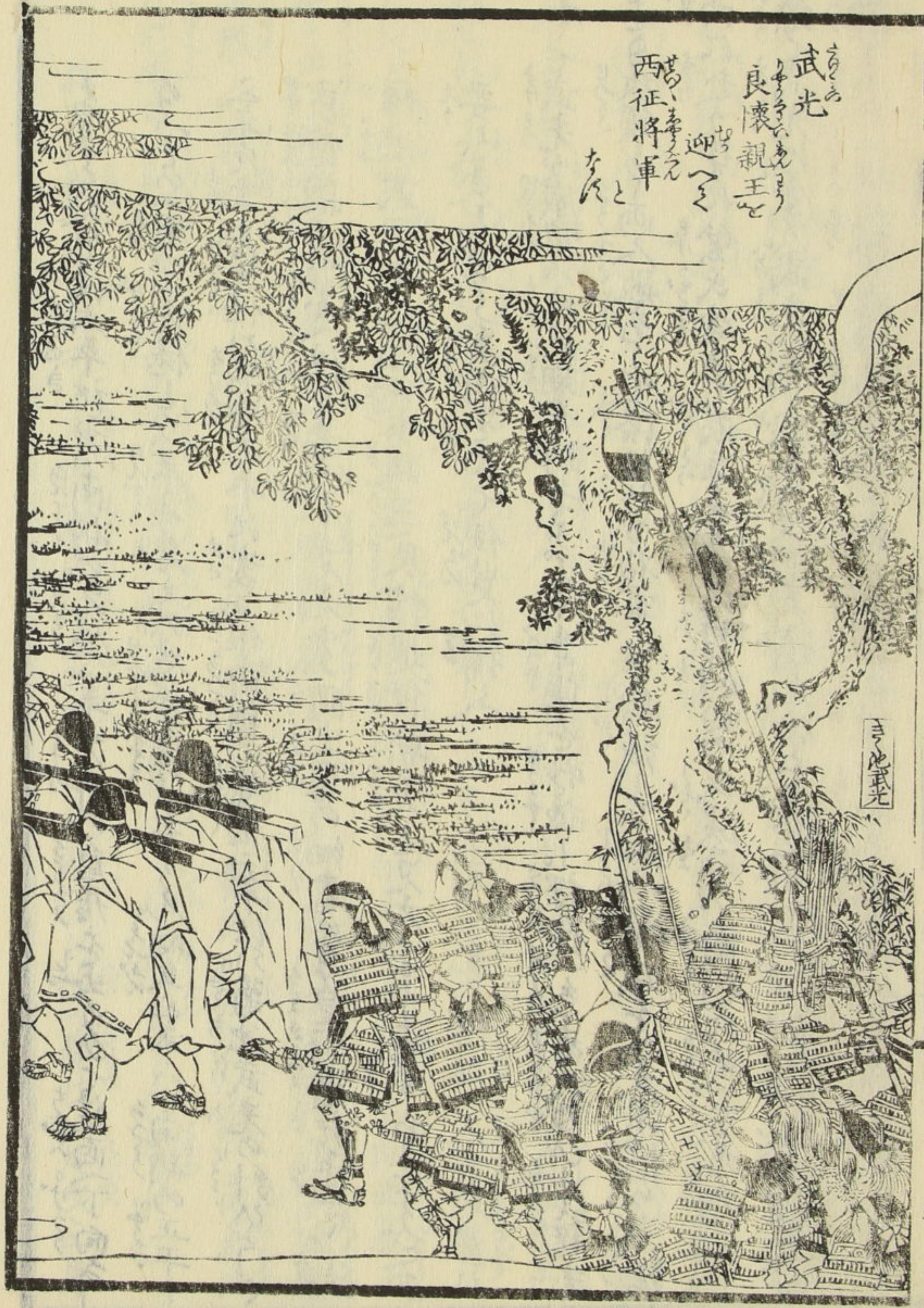




西征將軍

卅四

群玉堂藏板



武光  
良懷親王  
西征將軍  
迎之

武光

群玉堂藏板

群玉堂藏板



越てつ傍の城小松と柔池が飯路を塞ぐんと宇都官大和前司の河小副と豊前路を  
 塞ぎまゝ肥前刑部大浦の山に便して流後路を塞げり尋常事六進退合とて不途  
 を失ふべきと武光肩とせば圍を破つて肥後に帰る勢ひ先中破竹の如く大友等武  
 勢は悉く出て戦ひとの者武光武光と大友と攻んと將軍官を奉下五千餘騎以て  
 後小齋ふらの時太宰少貳頼尚河原大官司頼小多下頼尚の太宰に起つ大官司の武光  
 が跡を隔で城壘を急に構ふるに九箇所柔池怒つて兵を返し一時に九城を屠り竭  
 一進に進んで少貳小向少貳の松浦秋月及び島津の族と牒し合津津に扱て軍以  
 武光川をもち渡り攻むるとの急なり少貳頼尚戦ひ退く二十餘町武  
 光勝に乘じて追ひ替へ頼尚が子新少貳忠資先鋒に在て戦ひ死し二隊之隊接  
 戦烈しく不於て將軍官を被りつるふと之新日野左少辨坊城之位洞院権大納言  
 北山之位中納言源中納言春日大納言土門右少辨新田の氏族小至つて六世良田若松

田中桃井堀の田山若松悉く戦死してちかく敗軍に及びて武光躬兵を掲げ敵小  
 聚ると十七回底二箇所を被りつるといふは頼尚を殺すなり頼尚が軍大潰れて  
 宝蔵を奪ひ引上る武光頼尚を逃しとせしが將軍官を被りつるその身も戦ひ死す  
 兵を引連れて肥後に帰るは是より後兵を出し少貳大友と挑むと戦死す二進を  
 屋敷に圍て九州大畧武光に属してお於て將軍官相強して左系大夫氏経を以探題  
 とし後西へ下せむ氏経ハ斯波の経道朝が二男なり氏経を後小下向して大友氏  
 時が飯にあり武光攻て先出ると則ち人を制する利ありとて二千餘兵を率て流前  
 が原に逐ひ戦ふ氏経が軍糧糧一を満の飯小務る武光攻てこゑを攻む氏経防戦  
 懐ひかく利發して罪と謝し漸く遁じて系降小降し了矣給將軍のこゑと厚く躬  
 兵を率て柔池を征し西及て定めんとするに南軍常小の虚を窺ひ或は下  
 以持くぬありまゝ我宗我宗北山に匿して時機を圖るといふ遠く西及を征する



以那多 年月をさひわたり其身も京都に費下りかて武光の病卒しその子武教  
 家跡を嗣で武威を法と父祖に劣らば然るに義満將軍の世に及び應安七年甲寅  
 將軍躬九州を征せんと細川頼之を都督とす其の勢總て二十万通流紫にうち玉ふ  
 脱にその年秋九月將軍家兵を進め兼池武教と高良山に戦ふ兼池威勢を果却て  
 頼之が背に應じ竟に和ぬりてげり

按るに兼池寂阿より四世志を固うして武威を減せし西州に跋扈し南朝の恢  
 復を固は固て良懷親王を連へ西及の主物とまをせし其懐固より恢復の心あり  
 武光没し武教に至りいよく南朝の衰弊を承り竟に將軍家以降るといふも  
 肥前肥後流後を有て勇武の竹燼のまを盡し蓋良懷恢復の心ありと承るは  
 中務卿宗良親王小安する所の和歌一首勅葉集に載るは日尔文てのまをい  
 必く身にのほ世のまをいと載とあり是を以て承るべきなり

楠家系上三見

正成 河内判官

正行 右衛門督

正儀 左衛門佐

正勝 左衛門佐

正元 小次郎

### 楠正儀

八皇二皇代 後圓融帝康暦三年辛  
今安政三辰迄 四百七十七年 成

楠正儀者正行弟也守父兄業候吉野宮

保護不懈屢覬京師破敵軍其後義詮及

畠山道誓率大軍來攻之正儀防戦有日

矣敵遂退歸

正勝十津川の漂泊の流小次郎正元兼中下上を潜り得軍を満を覬ひ將久謙讓を  
 あざむくは是利の家人とを知らず兵を嚮てことを捕ふ正元勇て揮ひ敵人を斬り  
 怒うて擒に執り將軍宥て從へんとす正元死を誓て可成是承るべきと深久といへり



楠正儀の伝

舎兄正行河内五四條總多に戦死の後師泰来つて千波釵を圍む正儀よく防ぎ戦ふ。ふ  
 於て軍を退け替くしてを祀ひとす。然るに觀應二年に當り山名師氏桃井並兼爲  
 小叛きて南朝に屬き加之師並と確執の事有て惠源惠源また南朝に屬く。こを  
 不周で尊氏父子或ひ東に出西に奔る。宗師小安座を推く。翌文和元年のつと  
 づ、宗師の兵寡く。是の時官軍起る。一時に滅せんとて思は義詮偽て南帝と  
 和議あさんと請けまは。南帝ゆま。欺伴て許容あり。車を男山に到る。義詮  
 こを藉らして少く守衛不息。こ小放て楠正儀北畠顯能兵を合せ。その勢八千  
 餘騎小して暴に宗師を襲けまは。宗師兵大に潰れて。こを防ぐ術計る。細川頼春戰  
 ひ死し。義詮漸く近江小奪る。周て北畠顯能ハ本院本院新院新院主上主上崇崇東宮東宮仁直仁直を連  
 奉へ。賀名生に幽して三種の神器を南朝に收めけり。

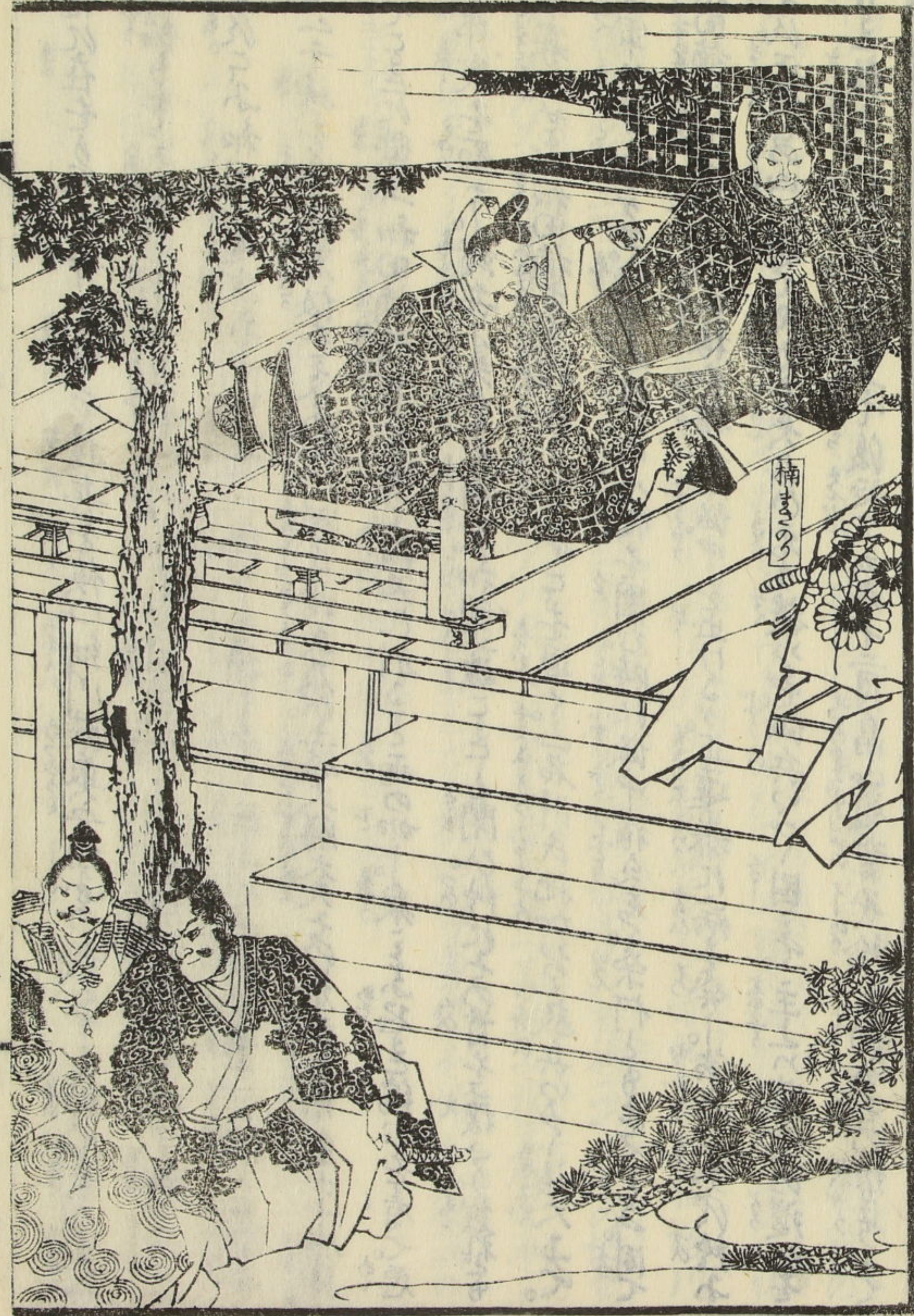
按るに建武二年八月尊氏 光嚴上皇の弟豊仁親王をきて 帝と仰る。奉  
 て罪を謝し。誓書て作ると上。車を宗師の父と請ふ。先帝ことと聽し。を  
 焚るに花之院に幽し。供奉の人と禁酒す。周て潜にこを道ま。吉野に入て 南  
 朝と称ひ。こより三種の神器を新主小傳へ。又と請ふ。乃新造の劍置境と  
 以て授けり。とある時。今年文小の三種の神器ハ當小。その時の新造ま。朝廷  
 累世相傳の所。おの吉野に潜る。その時。以身を謝し。のむと。と。

かくて宗師の寂然として南軍を拒ぐの兵。然も不虞の憂あるを。南帝  
 も八幡小在て。宗師に入。その時。尊氏綱末小あり。苗次師の軍に勝新。同義宗ハ敵後小。

義興義治謀念を去る。河村の飯入より。尊氏徳威を慮ふと。使て。また義詮に従  
 ふ。の。二方誘ひ及びけり。義詮被り入路あり。伴祇代。大寺に軍。以南方の指隊分て。

ことと新に防ぐ。と。父も衆寡の勢に相對せ。義詮大小勝利を得。と。正儀ハ

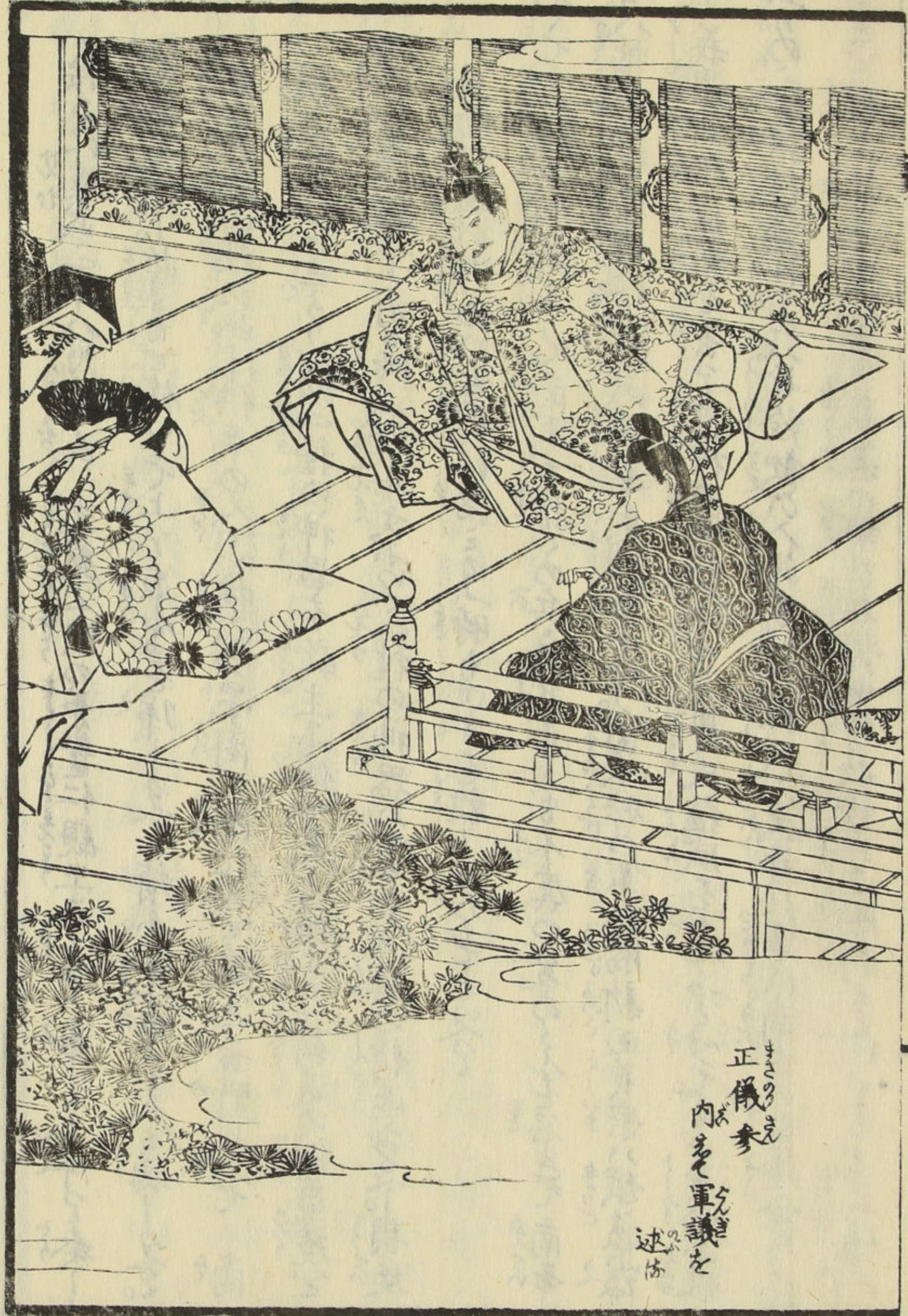




白河傳心子古家

〇共

羊五堂藏版



百井傳心子古家

正儀參  
内老軍議を  
述

君王堂藏版



備に在をりて。東寺小陳して援兵を俟つ。細川隆興守四山の兵二千を帥て来り。赤松  
 則祐もまた天兵を率て。東寺に到ると。色に會ひ。是より後。詮宇治路を廻り。洞が作に  
 軍次。小和正遠生年十六。八幡に詣りて。志操を奏し。既して。す知を退き。正後と兵とを  
 せ。二千騎を率し。荒坂を支ふ。細川顯氏清氏及び。去後。大膳。夫との。弟。悪五郎。等。六十侍。騎  
 ありて。色に。對ふ。和。田。楠。精。兵。を。勝。つ。隘。路。に。對。し。て。雨。の。如。し。衆。と。あ。は。れ。編。む。を。看。て。惡  
 五郎。衆。を。屬。す。諸。兵。小。先。を。て。痛。す。和。田。正。遠。と。し。と。聞。ひ。終。に。その。首。を。獲。り。て。然。れ。も  
 衆。寡。敵。せ。む。和。田。楠。支。え。難。夜。小。先。と。を。退。く。山。名。伸。氏。地。加。る。と。敵。兵。も。強。大。少。て。  
 南。軍。防。ぎ。止。め。ぐ。頻。り。進。む。八。幡。を。圍。む。時。に。敵。中。樞。多。く。奈何。と。も。ま。る。と。の。圍。て  
 和。田。楠。河。内。小。陣。に。兵。糧。を。援。入。と。敵。中。を。出。ける。が。正。遠。暴。に。病。を。發。し。治。療。達。た。終。つ  
 卒。に。正。後。の。凶。に。遇。て。戦。力。を。失。ひ。来。り。援。は。せ。ぬ。城。兵。も。困。る。主。上。の。黄。糸。の。遺。ひ。を  
 召。と。雜。兵。に。紛。と。落。る。す。後。延。文。五。年。十。二。月。島。山。道。誓。長。詮。を。勅。め。その。勢。号。し。て

二十万との義詮の兵七万騎尾が誘ひり。ち。驚。六。道。誓。の。津。と。山。向。ふ。兩。勢。正。小。雲。霞。の  
 下。山。野。郷。村。所。と。て。軍。勢。あ。ら。わ。い。な。り。け。り。あ。小。於。て。左。馬。頭。正。後。和。泉。守。正。武。為。後  
 して。皇。后。を。金。剛。山。の。眞。觀。心。寺。に。移。し。兼。じ。其。外。の。百。騎。を。得。て。赤。坂。に。あ。り。福。塚。川  
 を。橋。本。以下。五。百。騎。あ。り。平。石。城。を。構。へ。眞。木。野。酒。も。依。和。秋。田。等。八。百。騎。あ。り。八。尾。の。地。を  
 保。つ。此外。大。和。河。内。宇。智。宇。多。の。千。餘。人。の。若。を。移。衆。が。峰。小。構。へ。高。橋。を。揚。石。壁。と。せ。り。  
 觀。衆。を。あ。ら。う。く。見。勢。と。あ。ま。系。軍。に。小。押。来。ま。し。と。も。楠。和。田。が。勇。勢。を。憚。り。溝。の  
 圍。ま。を。り。て。色。に。正。を。攻。ん。と。欲。せ。む。諸。城。を。圍。む。日。で。送。ま。り  
 按。る。に。この。時。の。系。軍。兩。勢。合。せ。て。二。七。万。足。波。と。も。服。及。た。然。る。と。正。後。四。所。の。兵。合  
 ち。て。二。千。六。百。騎。十。分。が。一。小。是。ら。以。然。と。も。道。誓。長。の。勇。勢。を。憚。り。攻。ん。と。せ。ざる。楠。が  
 智。謀。勇。略。父。兄。に。劣。ら。る。と。事。あ。べ。し。惟。歎。く。南。朝。の。聖。運。日。に。衰。へ。し。と。て  
 かくて。道。誓。長。の。弟。尾。張。守。長。深。小。二。万。の。兵。を。援。け。和。佐。守。登。ら。し。む。官。軍。の。お。温。存。守。



義深を誘へん為最初峰を退きて新門山に移りて。敵軍退き散れぬと率ひ進  
 んて正を圍む官軍懼はんとくして敢て出て戦ひて。赤兵倍倍つて。渾身を率へて  
 は。一時野伏千餘人尾傍小出て射る。赤兵少く一卻くを又て。瀧谷社川志貴山平  
 野上。東門を開きて突出。て。正を撃つ。赤兵驚き散れ。て。逃る。て。千餘人官軍  
 退撃つて首を獲る。て。正を殺す。て。入道。味方の敗る。て。正。若。白田。大浦。今  
 川細川左近。等。以。義深を援け。む。時に官軍に共力せ。湯川某。敵。味方の陣。旗  
 を奉げ。誠。智。某。の。隊。人。と。多。く。正。と。山。兵。相。殺。ひ。勇。氣。壯。威。下。す。赤。兵。機。を。得。て。連。に  
 攻む。敵。兵。屈。して。守。り。と。く。正。を。捨。て。河。瀬。河。小。流。る。赤。兵。凱。歌。して。帰。陣。し。と。え。ん  
 按る。に。正。の。難。敵。小。至。り。圍。ら。る。の。内。札。あり。故。護。良。親。王。の。子。母。北。畠。准。后。の。女。方。り。  
 幼。稚。より。聰。明。多。し。南。帝。正。を。愛。し。の。心。美。大。の。軍。に。任。せ。と。自。然。の。守。衛  
 小。備。へ。又。圍。て。お。軍。官。と。稱。せ。り。故。に。新。門。山。の。戦。ひ。敗。れ。官。軍。屢。敗。と。は。赤。松。彈

正少弼氏範及び吉野十八郷の軍勢を援け。緒敵の衰れを援け。む。官。暴。心。を。受  
 へ。今。南。朝。の。敵。と。す。て。喻。へ。縷。の。如。く。美。下。南。帝。と。弒。し。て。北。朝。を。降。す。と。の。功。を。り。て。今  
 屬。する。吉。野。十。八。郷。を。領。せ。と。密。に。使。を。差。送。り。通。し。銀。嵩。山。に。登。り。て。旗。を。奉。安。名  
 生。の。内。裡。に。火。を。放。つ。南。帝。大。小。旗。き。り。二。條。前。開。向。と。お。と。し。其。の。徒。兵。千。餘。銀。嵩  
 を。攻。む。官。旅。を。營。防。ぐ。と。ま。る。に。屬。兵。と。の。不。受。と。惡。と。官。小。徒。兵。の。あ。ら。ひ。を。警。備。に。五  
 十。餘。人。を。何。と。も。ま。る。と。と。く。氏。範。等。防。敵。と。を。疑。を。被。り。て。教。簡。所。戦。ひ。場。で。南。軍。に  
 降。る。官。更。に。陰。方。を。密。く。通。して。南。都。に。去。り。す。り  
 加。る。内。札。あり。り。南。軍。旅。戦。力。を。失。ひ。攻。兵。の。ま。る。の。虚。に。ま。る。て。責。む。る。と。甚。急。なる。こ。小  
 於。て。新。泉。寺。平。岩。の。城。南。兵。防。ぎ。敵。ひ。く。と。城。を。棄。て。逃。去。り。八。尾。の。城。も。是。を。入。て。保。つ  
 べ。く。と。計。り。頼。り。守。兵。退。去。り。け。し。六。今。の。赤。坂。の。一。城。の。こ。妻。子。の。請。方。で。降。る。て。後。兵。と  
 合。し。赤。坂。小。迫。る。捕。和。田。力。を。竭。し。と。正。を。守。り。て。教。目。に。及。べ。ど。攻。兵。の。捕。り。に。信。して。防







石堂等と兵を合してを攻む。後詮果して防ぎ得ず。幸と奉じて近江小倉に官軍督  
て京師に入つ。諸方の兵を募ると父の由。武軍法及び通路を塞ぎ糧道を断らう。兵  
應する兵少く。我詮尾張守氏頼及び大軍を集め上洛せんと。清氏等詮方より兵を  
て南方に陣する。実小正儀が先見の智。毫釐も差はざうける。と世の人ことを林替せう。ことごと  
後貞治六年將軍詮詮費下らひ。後満子の職を嗣と父の由。まご幼穉なるをり。細川頼之  
先君より選渡不周てを補佐し。この要を察して正儀智略を竭く。父の由。弟某  
合期せめて。應安三年十二月正儀正武千劍破れ。記まご頼之。大兵を率てを攻め。城陷  
らひ。父の由。頼之の威威養ひ。夫より後紀及の諸城。頼之に陥落し。及び一。實  
に清殘る。烽火のど。然まご志操を易ひ。南幸に忠を竭く。康暦二年病で卒し。

### 足利基氏

合正午代 後光嚴帝貞治六年卒  
今安政三辰迄 四百九十年成

足利基氏者尊氏之子義詮之弟也尊

氏使之居鎌倉而為東州之鎮基氏善

用兵攻撃其不從我者累戰累捷東國

漸平皆其功也

傳之の義詮の喜小兒して他人の爲に慕棄せし。まごに。尊氏二男基氏不周東  
を總督せし。め初軍を輔佐せし。其後詮詮已に勝り。まごを。毎基氏を殺し。不周  
基氏神に祈り。早世して。まごの疑ひを釋し。一時の基氏を人。まごに。知るべし。

源氏 從四位下  
直冬 從四位下  
義詮 二代將軍  
基氏 從三位  
氏滿 從三位  
滿兼 從四位下  
持氏 從三位



足利基氏の注

將軍尊氏の弟足利左兵衛督直義軍功歴るに因て當時政務を掌はれ権勢熾なり然る小高師直兄弟もまた運載の功小結るに執事として権を平ふ時小高師直と杉重徳島山直宗と相誅つて師直を殺さんと其の事奔告して師直兄弟を引いて連累が彼を圍む連累を以て幕府に奔る師直兄弟もまた幕府を圍む尊氏須賀を攻守として師直に謂えむに我輩祖義家朝臣天下の武を以てし以て汝が祖父家朝に仕て一日君臣の天を小悟らば然るに汝今小忿を懷き我を圍て天を失はば我勢を殺せし己に強を被るといふも汝が後藉天縁を遺下と師直は之を對していさく君臣と上及小怨してより臣は君の後に従て在る百戦百勝堅きを破り後と碎くとの勲功孰く肩て比なき然るに汝は信臣が族を誅せんと因て罪多きを謝せんが爲に奔るに向ふ所より君臣を以て師直を答て上杉重徳島山を遠流す

政務と停らば君小平へんと元之如くのこと須賀を以て報命以て尊氏上杉重徳島山を破り後流す。連累を執政と停めけり。乃に汝が後縁を誅念より永原小連直義に代りし二男基氏と謙念に遣し。東國の徳と上杉憲頭を以て執事となし是より基氏謙念に在りて叛く者へことと誅し。大小武威を掲げし東國を以て風小應下り謙念に属する小高師直威権入及び長公明東管領と称けり。然るに文和元年の春新田義興殿屋敷治信濃上野の兵を率い。武藏野の軍に尊氏とて征さんと躬大軍と帥て謙念を率い新田の軍に對しけるが。二敵小敗せし。是より謙念を攻めし。石濱に奔る。仁木損重等不忠に於て新田の軍敗るし。本國帰るが。連累謙念を攻めし。基氏の後権南遠に在りし。謙念は軍利あり。折赤軍勢不足とて基氏を奉じて是もまた石濱に奔りける。義興等謙念に入ると威勢關八州小揮する時尊氏大軍を率い。箇中嶽小義宗と逃げ尋て謙念を攻めし。義興對まぶるが。兵を引いて河村城に入る。後謙念を引退けし。尊氏



基氏を措て関東と總督せり。島山河波が監國清と以て執事とひき後島山道誓執事  
 の時將軍を詮基氏を嫌忌り。及乃道誓の虚に威を震んと基氏と説て上洛し南軍  
 と奪んとひ及詮とまと納て大軍と卒し。赤坂城を攻むると不脱正候が傳ひり。臣より  
 道誓謙念に伴り。その後を逸し己に従ふ者と登庸の従ひざる者ハ誅ト斥く。不脱正候は諸士  
 連署して基氏に弘へ道誓が罪と責め基氏休を遣りて大に道誓と遣責し道誓謙  
 念謝するに結たひ。乃尾張守及深と共に謙念を去て伊豆の侯禅者に頼る。その後貞  
 治二年六月上杉憲顕を執事とひ。この下に因て芳賀入道禅可大に怒りて上野の板鼻小  
 軍に基氏討て大軍と卒し。禅可が軍と武及小敗る。この事蹟傳長けし。不脱正候と云  
 して不脱正候は伊豆利氏の事蹟傳長けし。不脱正候と云はる。

日本百將傳一交許卷之十



